

「ルカによる献呈の辞」

ルカ 1:1~4

1. はじめに

(例話) トーマス・ジェファーソン (アメリカ合衆国第3代大統領) の本の宣伝文
「国立スミソニアン博物館 (Smithsonian Museum)」で売られている復刻版

「トーマス・ジェファーソンは、77歳の時に、新しい本を編み出した。『ナザレのイエスの生涯と倫理』という本である。彼は、新約聖書の4福音書からの抜粋を時間順に並べ、イエスの生涯、たとえ話、道徳的教えなどの再構築を試みた。彼は、英語、フランス語、ラテン語、ギリシア語の4種類の聖書から切り取り、それを並べて比較した。イエスの教えを抽出し、より明確に理解するためである。ジェファーソンは、『イエスの教えは、人類に提示された最も崇高で情け深い道徳律である』と信じていた。もちろん、イエスの神性や奇跡的力を感じさせるような箇所は、すべて省かれている」

(1) 4つの福音書を並べ、時間順にメシアの生涯を追って行く。

(例話) 裾野市の広報に掲載された富士山の写真 (5箇所から)

- ①A. T. Robertsonの「A Harmony of the Gospels」をガイドラインとして使用。
- ②マルコ、マタイ、ルカ、ヨハネの順に4つのコラムに並べられている。

(3) 4つの福音書の関係

- ①マタイ、マルコ、ルカを共観福音書と言う。
- ②ヨハネを第4福音書と言う。
- ③マルコの福音書の優位性
- ④マタイとルカは、マルコの福音書の資料を使っている。
- ⑤マタイとルカだけに共通した資料もある (Q資料)。
- ⑥さらに、マタイだけの資料 (M資料)、ルカだけの資料 (L資料) もある。
- ⑦ルカは、時間の流れに最もこだわっている。

(4) 4つの福音書の特徴 (前書きにヒントがある)

①マルコ：前書きなし

- *ローマ人向けの福音書
- *教えよりも行動に重点がある。
- *「すぐに」という言葉が40回以上出てくる。
- *メシアを「【主】のしもべ」(イザヤ書)として描いている。
- *マコ 10:45

「人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです」

②マタイ：メシアの系図

*ユダヤ人向けの福音書

*旧約聖書の預言の成就に強調点がある。

*メシアを「ユダヤ人の王」として描いている。

③ルカ：献呈の辞

*ギリシア人(知識人)向けの福音書

*メシアを「理想的な人(知的、肉体的に)」として描いている。

④ヨハネ：長い前書き

*教会全体のための福音書

*共観福音書が書き漏らしたことを書いている。

*行動よりも教えに重点がある。

*メシアを「神の子」として描いている。

(5) 解釈の原則

①ヘブル的解釈

②フルクテンバウム師の教えからヒントを得る。

③日本人への適用

2. アウトライン

(1) ルカとは誰か。

(2) テオピロとは誰か。

(3) ルカの資格は何か。

(4) ルカの目的は何か。

3. メッセージのゴール

(1) ルカの謙遜

(2) メシアの生涯の歴史性

(3) 世界史の中のキリスト教

このメッセージは、ルカによる献呈の辞について学ぼうとするものである。

I. ルカとは誰か

1. この福音書には、著者ルカの名が出てこない。
 - (1) 2世紀初頭から、ルカであるという伝承がある。
 - (2) 伝承では、ルカはシリアのアンテオケ出身の異邦人であるとされている。
 - (3) ルカは、パウロと同様に、一度も公生涯の間のイエスに会ったことがない。

2. コロ4:14

「愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによるしくとっています」

- (1) ルカは医者である。
 - ①「医者」という言葉は、ここでは敬意を込めて使われている。
 - ②当時、医学はようやく科学的営みを開始した段階であった。
 - ③ルカは、信者になる前から知的な人物であった。
- (2) ルカが異邦人かどうかに関して、異論がある。

3. パウロの同労者

- (1) 使徒の働きの中で、主語が「彼ら」から「私たち」に代わる箇所が3つある。
 - ①使16:10
 - ②使20:5
 - ③使27:1
- (2) ルカは、パウロからさまざまな情報を得ることができた。

II. テオピロとは誰か。

1. 「テオピロ」(セオフィロス)とは、「神に愛されている者」「神の友」という意味。
 - (1) この言葉は、クリスチャン一般を意味するものである。
2. 「尊敬する」(クラティストス)という敬称が付いているので、実際の人物である。
 - (1) 聖句の例
 - ①使23:26
「クラウデオ・ルシヤ、つつしんで総督ペリクス閣下にごあいさつ申し上げます」
 - ②使24:2
「パウロが呼び出されると、テルトロが訴えを始めてこう言った。『ペリクス閣

下。閣下のおかげで、私たちはすばらしい平和を与えられ、また、閣下のご配慮で、この国の改革が進行しておりますが、』

③26 : 25

「するとパウロは次のように言った。『フェスト閣下。気は狂っておりません。私は、まじめな真理のこばを話しています』

(2) 以上のことから、テオピロとは、ローマ帝国の高官であったと思われる。

3. アンテオケに住んでいた裕福で影響力のある人物

4. 大祭司 (A. D37~41年) で、セオフィロス・ベン・アンナスという人物がいた。

(1) 彼は、アンナスの息子で、カヤパの義理の兄弟。

5. 大祭司 (A. D65~66年) で、マタテアス・ベン・アンナスという人物がいた。

6. ローマ人の弁護士で、パウロの裁判の弁護をした。

(1) ルカの福音書と使徒の働きは、裁判資料として用意された。

①パウロの無罪を証明するための資料

②キリスト教の無害性を証明するための資料

7. 実際は、誰であるかはわからない。

(1) ローマ帝国の高官であろう。

(2) ルカの著作活動を援助した、パトロンであろう。

III. ルカの資格は何か

1. ルカの前書きは、当時の文学形式に沿ったものである。

(1) ヨセフスの『アピオンへの反論』がその好例である。

①この書は、1部と2部に分かれて書かれている。

②ルカもまた、1部(福音書)と2部(使徒の働き)を意識して書いている。

③ルカは、最初から2部作を予定していたと思われる。

(2) 献呈の辞は、美しい文体で書かれたひとつの文である。

①1~2節と、3~4節は、対照関係にある。

2. 1～2節

「私たちの間ですでに確信されている出来事については、初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人々が、私たちに伝えたそのとおりを、多くの人が記事にまとめて書き上げようと、すでに試みておりますので、」

(1) 「多くの人」とは、何人かの人たちといった程度の意味である。

① 当時の正式な文章では、こういう言い方をした。

(2) 最初の「私たち」は、信者全体である。

① 訳文の比較

* 「私たちの間ですでに確信されている出来事」(新改訳)

* 「わたしたちの間に成就された出来事」(口語訳)

* 「わたしたちの間で実現した事柄」(新共同訳)

(3) 次の「私たち」は、より狭い範囲の信者である。

(4) 「初めからの目撃者」

① イエスの公生涯の始まりから、という意味。

* バプテスマのヨハネとイエスの誕生物語は、公生涯への序曲である。

② 彼らは、「みことばに仕える人々」でもある。

(5) 目撃者が伝えた情報を、正確に記事にまとめた人たちが何人かいた。

3. 3～4節

「私も、すべてのことを初めから綿密に調べておりますから、あなたのために、順序を立てて書いて差し上げるのがよいと思います。尊敬するテオピロ殿。それによって、すでに教えを受けられた事がらが正確な事実であることを、よくわかっていただきたいと存じます」

(1) 3つの対照がある。

① 「私も」

* 「多くの人たち」に対応する。

② 「順序を立てて書いて差し上げる」

* 「多くの人が記事にまとめて書き上げようと」

③ 「正確な事実であることを」

* 「初めからの目撃者で、みことばに仕える者となった人々が、私たちに伝

えたそのとおりを、」

- (3) ルカは、先人たちの作品を否定していない。
 - ①むしろ、その権威を認めている。
 - ②マルコの福音書、Q資料、L資料などが活用されている。

- (4) ルカの資格は2つある。
 - ①すべてのことを初めから綿密に調べている。
 - ②歴史家の目で、順序立てて書く。

IV. ルカの目的は何か。

- 1. テオピロが信者であったかどうかは分からない。
 - (1) 彼は、メシアの生涯、福音、キリスト教の教理などについて教えを受けていた。

- 2. テオピロがすでに教えられていた内容が、信頼できるものであることを証明する。

- 3. この文書がローマ帝国内で流布し、信者が多く起こされるように。

結論：

- 1. ルカの謙遜
 - (1) ルカは自らの名前を出していない。
 - (2) 彼は、教会の一員であることに満足していたのであろう。
 - ①みからだの中の一部として、賜物を発揮した。

- 2. メシアの生涯の歴史性
 - (1) メシアの歴史性を疑う人への最高の説明が、ここにある。

 - (2) 福音伝達の5つのステップ
 - ①信者の間ですでに実現した出来事（神が歴史に介入された出来事）
 - ②目撃者（みことばに仕える人々）が、それを伝えた。
 - *「パラディオウミ」という動詞。
 - *権威ある伝承の伝達である。

- ③多くの人が記事にまとめた。
- ④ルカはそれらの記事を綿密に調査し、順序立てて書いた。
- ⑤今私たちが、ルカの福音書を通して、メシアの生涯について情報を得ている。

3. 世界史の中のキリスト教

(1) ルカ以前の文書は、いわば、教会内で用いられる文書であった。

(2) ルカは、テオピロに自らの福音書を献呈した。

①出版を計画したかどうかは分からないが、ローマ世界に広く流布することを意図したことは確かである。

②ルカは、世界史の中にキリスト教を位置づけようとしたのである。

(3) 私たちへの適用

①包装紙が貧弱だという理由で、宝を届けることを躊躇してはならない。

②2 コリ 4 : 7

「私たちは、この宝を、土の器の中に入れていっています。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです」

③福音は、私的なものから、公のものになる必要がある。

「ヨハネによる序言(1)」

ヨハ1:1~5

1. はじめに

(1) 4つの福音書を並べ、時間順にメシアの生涯を追って行く。

① 前回は、ルカによる献呈の辞を取り上げた。

② 今回は、ヨハネによる序言を取り上げる(ヨハ1:1~18)。

* 時間的に最も早い。

(2) ヨハネの序言の3つの特徴

① 最も崇高なキリスト論である。

* これに匹敵する箇所は、新約聖書に2ヶ所しかない。

* コロ1:15~17

* ヘブ1:1~3

② 詩的文書である。

③ 神学的文書である。

* 神学校の1学期をかけて学ぶほどの内容である。

* 内容が豊富なので、3回に分けて解説する。

(3) 文書の構造

① 階段を一つずつ上るように、ゴールに向かっている。

② イエスの受肉がゴールである(14節)。

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」

2. アウトライン(1~5節)

(1) メシアの本質(1~2節)

(2) メシアによる創造の業(3節)

(3) 光と闇の戦い(4~5節)

3. メッセージのゴール

(1) ユダヤ人にとってのロゴス

(2) 共同体としての証し

(3) 復活後に書かれたことの意味

このメッセージは、ヨハネの序言からメシアについて学ぼうとするものである。

I. メシアの本質 (1~2節)

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた」

1. 「初めに」

(1) ヨハネは、創世記1:1以前に遡って、そこからこの福音書を書き始める。

- ①マルコは、バプテスマのヨハネの活動から書き始める。
- ②マタイは、アブラハムの系図から書き始める。
- ③ルカは、献呈の辞から書き始める。
- ④ヨハネは、共観福音書の書き始めよりもさらに遡って、書き始める。

(2) 「初めに」という言葉は、キリスト教信仰の土台となる神学的概念を示している。

- ①ヨハネは、神しか存在していなかった時に、戻っている。
- ②キリスト教では、神以前には戻れない。
- ③異教の神話には、神々が造られる話が出てくる。

(3) 「初めに」存在したお方として、神ではなく、「ことば」を紹介している。

- ①驚くべきことである。
- ②では、「ことば」とは誰か。

2. 「ことば」

(1) ギリシア語の「ロゴス」である。

①ギリシア哲学では、ロゴスに2つの意味がある。

- *理性 (メシアは神のアイデア-理想的な形-である)
- *言葉 (メシアは神の表現である)

②しかし、ヨハネはギリシア哲学者ではなく、ユダヤ人の漁師である。

- *紀元1世紀のユダヤ教の用語をギリシア語に訳した。
- *ヨハネだけがメシアを示す言葉として「ロゴス」を使用している。
- *しかも、「序言」にしか出てこない。

(2) ヘブル語では「ダバール」である。

①旧約聖書では、「ダバール」が擬人法で用いられている。

②つまり、「ことば」が人格的存在であるかのように行動しているということ。

*創15:1、詩33:4~6、147:15、イザ9:8、55:10~11、エゼ1:3

③イザ55:10~11

「雨や雪が天から降ってもとに戻らず、必ず地を潤し、それに物を生えさせ、芽を出させ、種蒔く者には種を与え、食べる者にはパンを与える。そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる」

④ユダヤ教のラビたちは、アラム語で「メムラ」という概念を作り出した。

*これもまた、「ことば」という意味である。

*「メムラ」に関して、6つの基本的教えを確立した。

*「メムラ」は、神とは区別されるが神である。

⑤ヨハネは、「メムラ」を「ロゴス」と訳した。

*ここには、同時代のユダヤ人に対するメッセージがある。

*メシアは、「メムラ」である。

3. 「ことば」の3つの特徴

(1) 天地創造の前から、「ことば」は存在していた。

①「ことば」と神とは別の存在である。

(2) 「ことば」は、神と親密な交流関係にあった。

「ことばは神とともにあった」

①「ともに」(with) は、ギリシア語で「pros」である。

②この前置詞は、親密な交流関係を表している。

(3) 「ことば」は、神と一体であった。

「ことばは神であった」

①エホバの証人の解釈

*「ことば」の前に定冠詞が付いていないので、「a god」と訳す。

*この解釈は、イエスの神性の否定か、多神教に行き着く。

②正しい解釈は、「神」を形容詞と取ることである。

4. 1節の内容の再確認(2節)

「この方は、初めに神とともにおられた」

(1) ユダヤ人との論争で、この点が特に重要になる。

①ヨハ5:18

「このためユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとするようになった。イエスが安息日を破っておられただけでなく、ご自身を神と等しくして、神を自分の父と呼んでおられたからである」

②ヨハ19:7

「ユダヤ人たちは彼に答えた。『私たちには律法があります。この人は自分を神の子としたのですから、律法によれば、死に当たります』」

II. メシアによる創造の業(3節)

「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない」

1. 創造物語が記されている。

(1) 「すべてのもの」

①神以外のすべてのもの

②天使も含む。

(2) 「この方によって」

①ギリシア語の前置詞「dia」

②英語で、「by Him」、あるいは、「through Him」である。

2. 「ことば」が神よりも劣るということではない。

(1) 神と同時に、創造の業に参加したということ。

III. 光と闇の戦い(4~5節)

「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった」

1. 「いのち」と「光」が関連付けられている。

(1) 「いのち」はギリシア語で「zoe」である。

①ヨハネの福音書で36回出てくる。

②メシアはいのちの源である。

*創造主として、肉体のいのちを与えてくださった。

*贖い主として、霊的いのちを与えてくださった。

*救い主として、永遠のいのちを与えてくださった。

2. 光とやみの戦いは、ヨハネの福音書のテーマのひとつである。

(1) 光が闇の世界に侵入し、輝いている。

①動詞は現在形。継続した動作。

(2) 「やみはこれに打ち勝たなかった」

「暗闇は光を理解しなかった」(新共同訳)

①動詞は、「カタランバノウ」である。

②光と闇の二元論ではないので、「理解しなかった」がよい。

③聖書は、闇にそれほどの力を認めていない。

結論：

1. ユダヤ人にとってのロゴス

(1) メムラは神とは別の存在であるが、神と同じお方でもある。

①1節は、メムラの1番目の特徴を表現している。

②ラビたちは、このパラドックスを説明しようとはしなかった。

③三位一体の教理によって、初めて説明可能となる。

④ここでは、唯一の神が複数の位格をもって存在していることが示されている。

(2) メムラは天地創造に参加されたお方である。

①3節は、メムラの2番目の特徴を表現している。

2. 共同体としての証し

(1) 14節

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」

①「私たち」という主語

②16節にも、「私たち」と出てくる。

(2) メシアの生涯の証しは、個人的なものではなく、信者の共同体が共有する。

①ヨハ21:24

「これらのことについてあかしした者、またこれらのことを書いた者は、その弟子である。そして、私たちは、彼のあかしが真実であることを、知っている」

3. 復活後に書かれたことの意味

(1) 光と闇の戦いは二元論の反映ではないが、それでも現実的なものである。

①ヨハネの福音書の中で、闇の力が最高潮に達するのは、ユダの裏切りの箇所。

②ヨハ13:30

「ユダは、パン切れを受けるとすぐ、外に出て行った。すでに夜であった」

③復活において、光が闇を追い出した。

(2) ヨハ20:19~20

「その日、すなわち週の初めの日の夕方のことであった。弟子たちがいた所では、ユダヤ人を恐れて戸がしめてあったが、イエスが来られ、彼らの中に立って言われた。『平安があなたがたにあるように。』こう言ってイエスは、その手とわき腹を彼らに示された。弟子たちは、主を見て喜んだ」

(3) ヨハ3:16の重要性

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」

①神の愛の業は完了した。

②私たちが、その愛に応答する番である。

「ヨハネによる序言(2)」

ヨハ1:6~13

1. はじめに

(1) 4つの福音書を並べ、時間順にメシアの生涯を追って行く。

①ルカによる献呈の辞、ヨハネによる序言(1)を終えた。

②今回は、ヨハネによる序言(2)である(ヨハ1:6~13)。

(2) 文書の構造

①階段を一つずつ上るように、ゴールに向かっている。

②イエスの受肉がゴールである(14節)。

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」

2. アウトライン(6~13節)

(1) ヨハの登場(6~8節)

(2) 光の登場(9~11節)

(3) 神の子たちの誕生(12~13節)

3. メッセージのゴール

(1) ユダヤ人にとってのロゴス

(2) 代理人(agent)の意味

(3) 救いの方法

このメッセージは、ヨハネの序言からメシアについて学ぼうとするものである。

I. ヨハネの登場(6~8節)

1. 6節

「神から遣わされたヨハネという人が現れた」(新改訳)

「ここにひとり人があって、神からつかわされていた。その名をヨハネと言った」(口語訳)

「神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである」(新共同訳)

(1) ロゴスとヨハネの対比

①「初めに、ロゴスがおられた」(永遠の時間)

②「神から遣わされた一人の人がいた」(有限な時間)

(2) 代理人(agent)としての役割

- ①神から派遣された。
- ②使命が与えられていた。
- ③旧約聖書の預言者たちと同じである。
- ④ヨハネには、ロゴスの代理人としての使命が与えられていた。

2. 7～8節

「この人はあかしのために来た。光についてあかしするためであり、すべての人が彼によって信じるためである。彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである」

(1) ヨハネの使命は、証し人になることである。

- ①John the Baptist= John the Witness
- ②光について、証しすることが彼の使命である。

(2) 証しの目的

- ①ユダヤ人も異邦人も、男性も女性も、彼の証しによって光を信じるためである。
- ②普遍的救いを教えているのではない。

(3) 注意を喚起する言葉

- ①ヨハネは、光でなく、光について証しする人である。
- ②ヨハネを光だと誤解する人が出ないようにするため

II. 光の登場(9～11節)

1. 9節

「すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた」(新改訳)

「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」(口語訳)

「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」(新共同訳)

(1) 「まことの光」

- ①英語で「true light」である。
- ②ヘブル語の「エメット」は、揺るがないこと、信頼できること、を指す。
- ③偽の光は信頼できないが、まことの光は信頼できる。

(2) すべての人が救われるわけではない。

①人は無知であり、霊的闇の中にいる。

②まことの光であるお方は、全人類に真理を啓示する。

2. 10節

「この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった」(新改訳)

「彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた」(口語訳)

「言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった」(新共同訳)

(1) この方(ロゴス、まことの光)は、創造主でありながら、被造世界に來られた。

①この方は、被造世界の一部ではない。

②これは、ヨハネの福音書の中のクリスマス物語である。

(2) 世という言葉の意味

①ギリシア語で「コスモス」である(神によって整えられた被造の世界)。

②ヨハネの使用法では、「人間が住む地上の世界」と「人間」の両方を指す。

③いずれの場合も、「人間」を抜きにしての「コスモス」ではない。

(3) 悲劇は、「世はこの方を知らなかった」という点にある。

①知的認識のことではない。

②体験的知識のことである。

③特に、ヨハネの福音書では、命の交流、命の体験に強調点がある。

3. 11節にさらなる悲劇がある。

「この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」(新改訳)

「彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受け入れなかった」(口語訳)

「言は、自分の民のところへ來たが、民は受け入れなかった」(新共同訳)

(1) 「ご自分のくに」とは、「His own things」である(中性代名詞)。

①アブラハムに約束された地、ユダヤ人の住む地、聖書の地である。

②メシアの誕生と公生涯を意識した言葉である。

(2) 「ご自分の民」とは、「His own people」である(男性代名詞)。

①この方は、ユダヤ人のメシアとして來られた。

(3) ユダヤ人はメシアを受け入れなかった。

- ①聖書の中で最も悲しい聖句のひとつである。
- ②ユダヤ人は、メシアを拒否しただけでなく、メシアを信じる者も拒否した。
- ③ヨハネは、ユダヤ人の不信仰に驚いている。
- ④この状況は、今日でも続いている(イスラエルにおける反宣教団体の存在)。
- ⑤パウロは、ロマ書9～11章で、その不条理を論理的に解明している。

*ユダヤ人の不信仰

*異邦人の救い

*終末におけるユダヤ人の救い

III. 神の子たちの誕生(12～13節)

1. 12節に希望がある。

「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」(新改訳)

「しかし、彼を受け入れた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」(口語訳)

「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」

(1) 信仰による救いが教えられている。

- ①「その名」とは、メシアの実質である。
- ②「信じる」とは、知的理解ではなく、体験的決断(命の選択)である。

(2) 「エクサーシア」というギリシア語

- ①特権、力、資格、すべて訳語としては間違っていない。
- ②ヨハネは、法的意味での救いではなく、命の体験について論じている。
- ③「力」が最もいいと思われる。

2. 13節は、救いについての解説である。

「この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」

(1) この霊的誕生は、人間から出たものではない。

- ①3つの否定がある。

- (2) 神による(聖霊による)誕生である。

結論:

1. ユダヤ人にとってのロゴス(アラム語のメムラ)

- (1) メムラは、神とは別の存在であるが、神と同じお方でもある(1節)。

①三位一体の教理によって、初めて説明可能となる。

- (2) メムラは、天地創造に参加されたお方である(3節)。

- (3) メムラは、救いの代理人(agent)、仲介者である(12節)。

「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」

2. 代理人(agent)の意味

- (1) ロゴス(メムラ)は、地上における神の代理人(agent)である。

- (2) ヨハネは、ロゴスの代理人である。

①彼は光ではなく、証し人であることが強調されている(8節)。

②イエスが復活してから20年後でも、ヨハネの影響力はあった。

③使18:25

「この人は、主の道の教えを受け、霊に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかった」

④使19:1~3

「アポロがコリントにいた間に、パウロは奥地を通過してエペソに来た。そして幾人かの弟子に出会って、『信じたとき、聖霊を受けましたか』と尋ねると、彼らは、『いいえ、聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした』と答えた。『では、どんなバプテスマを受けたのですか』と言うと、『ヨハネのバプテスマです』と答えた」

- (3) 自分が光であるかのように振る舞うという誘惑

①説教者、音楽家、すべての奉仕者に、その危険性がある。

②教えを受ける側にも、同じ危険性がある。

③自分が光となろうとすることは、罪の本質である。

④そこから満足を得ている人は、必ず失望する。

3. 救いの方法 (12～13節)

「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである」

(1) パウロが教える、「信仰と恵みによる救い」と同じである。

(2) 信仰により神の子どもとされる。

①子どもは、「テクノン」(複数形はテクナ)である。

②別の言葉として、「ヒュイオス」がある。

③ヨハネはこの言葉を、イエス・キリストだけに適用している。

④異邦人の感覚では、人は誰でも「神の子」である。

⑤日本語の「神の子」の3種類の意味

*イエスは、「神の子」(ヒュイオス)である。

*クリスチャンは、「神の子」(テクノン)である。

*人類はすべて、神によって創造されたという意味で「神の子」である。

(3) 3つの否定(人間が救いを得ようとする方法)

①血によってではなく

*先祖や両親の血によるのではない。

②肉の欲求によってではなく

*人間の努力や比較によるのではない。

③人の意欲によってではなく

*両親の願いによるのではない。

(4) 福音の3つの要素と信仰

①メシア死

②メシアの埋葬

③メシアの復活

④メシアとの命の関係を強調する必要がある。

*信じるとは、知的承認ではなく、実存的信頼である。

「ヨハネによる序言(3)」

ヨハ1:14~18

1. はじめに

(1) 4つの福音書を並べ、時間順にメシアの生涯を追って行く。

①ルカによる献呈の辞、ヨハネによる序言(1)と(2)を終えた。

②今回は、ヨハネによる序言(3)である(ヨハ1:14~18)。

(2) ヨハネによる序言についてのコメント

(例話) ペリー先生のアドバイス(最後に序言を書け!)

①ヨハネは、歴史的出来事を書いた後に、神学的論考を付け加えたのであろう。

②ヨハネの序言は、この福音書を読み終わってから読むと、より分かる。

2. アウトライン(14~19節)

(1) 受肉の事実(14節)

(2) 挿入句(15節)

(3) 受肉の解説(16~18節)

3. メッセージのゴール

(1) ユダヤ人にとってのロゴス

(2) 栄光という言葉の意味

(3) 神の臨在の個人的体験

このメッセージは、ヨハネの序言からメシアについて学ぼうとするものである。

I. 受肉の事実(14節)

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」

1. 「ことばは」(ロゴス)

(1) ヨハネの福音書では、1:1と1:14にしか出てこない。

①他の福音記者たちは、メシアを「ことば」とは呼んでいない。

②「ことば」に関する解説は、2つの部分に分れる。

③前半(1~13節)

* 「ことば」の永遠性と、神性

* 「ことば」は、宇宙の創造主である。

④後半(14~18節)

* 「ことば」の歴史への介入

2. 「人となって」

「ことばは人となって、」(新改訳)

「言は肉体となり、」(口語訳)

「言は肉となって、」(新改訳)

(1) 神から人間に変わったということではない。

①ことばの神性に人間性が付加された。

(2) 人間のような姿になられた(見えた)ということでもない。

①ことばは、完全に人間性を持たれた。

(3) この人間性と罪とは無関係である。

①本来の人間性は、罪のないものである。

(4) これを神学的には「受肉(Incarnation)」と呼ぶ。

①キリスト教信仰の基本的合意事項である。

②この事実は、自動的に他の救いの可能性をすべて排除する。

③初期の信者たちは、この信仰のゆえに殉教の死を遂げて行った。

④1 ヨハ4:2~3

「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ています」

3. 目撃者の証言

「私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。」(新改訳)

「わたしたちのうちに宿った。わたしたちはその栄光を見た。それは父のひとり子としての栄光であって、」(口語訳)

「わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、」(新共同訳)

(例話) 中学時代の社会科の授業で、ジンギスカンについての情報を得た。

これは、目撃者の情報である。

(例話) 大学時代の寮生活で、イエスについての情報を得た。

これは、情報を信じた人の情報である。情報源は、イエスの弟子たちにある。

(1) 「私たち」とは誰か。

- ①イエスの公生涯の目撃者たち
- ②ヨハネを含む信者の共同体
- ③14節は、目撃者の証言。

(2) 彼らは何を見たのか。

- ①「住む」「宿る」は、ギリシア語で「スケイノオウ」という動詞である。
- ②ヘブル語のシャカイナと関係のあるギリシア語である。
- ③直訳は、「テントを張った」「幕屋を張った」である。
- ④ロゴス(神性を持った方)が幕屋(人性)の中に宿った。

(3) ヘブル的背景(絵画的説明)

- ①出エジプト記に出てくる幕屋と、メシアの受肉の相関関係
- ②荒野の旅において、イスラエルの民の間に幕屋があった。

「そのとき、雲は会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた」(出40:34)

* 奴隷から自由の民へ

* 幕屋は、神がともにおられることの証拠となった。

* 幕屋には、シャカイナグローリーが満ちた。

* 目に見えない神の臨在を示す現象である。

- ③人生の荒野において、私たちの間に神の幕屋がある。

* イエスは、目に見えない神の臨在を示すお方である。

(4) 「父のみもとから来られたひとり子」

- ①「ひとり子」はギリシア語で「モノゲネイス」である。
- ②One and Only, Unique
- ③ヨハネは、「神から遣わされた使者」である。
- ④ロゴスは、「父のみもとから来られた比類なき御子」である。

(5) 「恵みとまことに満ちておられた」

- ①「恵み」とは、ヘブル語で「ヘセッド」(契約への忠実さ、契約に基づく愛)。
- ②「まこと」とは、ヘブル語で「エメット」(揺るがされることのないお方)。

③この2つは、神の基本的な性質でもある。

II. 挿入句(15節)

「ヨハネはこの方について証言し、叫んで言った。『私のあとから来る方は、私にまさる方である。私より先におられたからである』と私が言ったのは、この方のことです』

1. 挿入句の意味

(1) 時間的にはヨハネはイエスよりも先に登場した。

- ①誕生において
- ②奉仕において

(2) しかし、イエスの存在と奉仕は、ヨハネに先んじていた。

2. 挿入句の目的

(1) ヨハネの影響を受けた人たちの誤解を解くため

(2) 「光」についてのコメント。太陽と月の関係。

III. 受肉の解説(16~18節)

1. 16節

「私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである」

(1) 再び、「私たち」(共同体の体験)が出てくる。

(2) 「恵みの上にさらに恵みを受けた」

- ①へブル的表現であろう。
- ②「Holy of Holies」「Song of Songs」「King of Kings」

2. 17節

「というのは、律法はモーセによって与えられ、恵みとまことはイエス・キリストによって実現したからである」

(1) 2つの時代の対比

- ①律法の時代と恵みの時代の対比
- ②「律法」という言葉には、否定的意味はない。
- ③人類救済計画は、順を追って実行に移された。

- ④律法の時代もまた、恵みにあふれていた時代である。
- ⑤犠牲のいけにえは、神との平和を回復するための方法であった。
- ⑥パリサイ人たちの問題は、律法の誤用にあった。

3. 18節

「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされたのである」

- (1) ヘブル的には、神を見ることは死を意味した。
 - ①旧約聖書には、神を見たと思われる人物が登場する(モーセ、イザヤ)。
 - ②しかし、彼らが見たのは神ご自身ではなく、シャカイナグローリーである。
- (2) メシアは、究極的なシャカイナグローリーである。

結論：

1. ユダヤ人にとってのロゴス(アラム語のメムラ)

- (1) メムラは、神とは別の存在であるが、神と同じお方でもある(1節)。
 - ①三位一体の教理によって、初めて説明可能となる。
- (2) メムラは、天地創造に参加されたお方である(3節)。
- (3) メムラは、救いの代理人(agent)、仲介者である(12節)。
- (4) メムラは、神の栄光の表れ(シャカイナグローリー)である(14節)。
- (5) メムラは、契約の仲介者である(17節)。
- (6) メムラは、啓示の仲介者である(18節)

2. 栄光という言葉の意味

- (1) ヨハネの福音書では、「栄光」と「時(十字架の時)」がリンクしている。

①7:30

「そこで人々はイエスを捕らえようとしたが、しかし、だれもイエスに手をかけた者はなかった。イエスの時が、まだ来ていなかったからである」

②12:23

「すると、イエスは彼らに答えて言われた。『人の子が栄光を受けるその時が来ました』

③13:1

「さて、過越の祭りの前に、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された」

(2) 「栄光を見た」の内容(6段階で考える必要がある)

- ①誕生
- ②公生涯(変貌のメシア)
- ③十字架(これがクライマックス)
- ④復活(十字架の有効性を証明した)
- ⑤昇天(大祭司としての働き)
- ⑥再臨(クリスチャンの希望)

3. 神の臨在の個人的体験

- (1) イスラエルの民の体験(抽象的なものではなかった)
- (2) 「私たち」(ヨハネを含む共同体)の体験(現実的なものであった)
- (3) 神の臨在が個人的現実となる必要がある。
(例話) 母の死について(悲しみと安堵)
(例話) 被災地の悲劇について

「2つの系図」

マタ 1:1~17 ルカ 3:23~38

朗読箇所 マタ 1:1~17 ルカ 3:23~24、38 (25~37節は省略)

1. はじめに

(1) 4つの福音書を並べ、時間順にメシアの生涯を追って行く。

- ①ルカによる献呈の辞 (1回で終えた)
- ②ヨハネによる序言 (3回で終えた)
- ③メシアの系図が2つある (1回で終える)。

(2) 系図の重要性

①身元証明

*現代のユダヤ人の帰還問題

②土地の分割

*部族、氏族、家族

③祭司職の条件

*アロンの家系

④王の条件

*イスラエルの王はイスラエル人 (申 17:15)

*ダビデ以降はダビデの家系 (2サム 7:16)

*ヘロデ大王は、エドム人であったために、正統性がない (マタ 2:2)。

⑤メシアの条件

*アブラハム、ダビデの子孫

2. アウトライン

- (1) 誰の系図か。
- (2) なぜ時間軸が逆なのか。
- (3) 登場する人数は正確か。
- (4) なぜ女性の名前が含まれているのか。

3. メッセージのゴール

- (1) 恵みの要素 (1)
- (2) 恵みの要素 (2)

このメッセージは、2つのメシアの系図から、イエスの信頼性を確認しようとするものである。

I. 誰の系図か。

1. マタイの福音書

- (1) イエスの義父ヨセフの系図である。
 - ①イエスは、肉体的にヨセフの子ではない。
 - ②処女降誕の箇所が、系図の直後に登場する。

- (2) イエスのメシア性を証明するための系図である。
 - ①イエスは、法的にヨセフの子である。
 - ②イエスは、法的にアブラハム、ダビデの子孫である。

2. ルカの福音書

- (1) イエスの母マリアの系図である。
 - ①ルカ3:23
「**教えを始められたとき、イエスはおよそ三十歳で、人々からヨセフの子と思われていた。このヨセフは、ヘリの子、順次さかのぼって、**」
 - ②「30歳」は、祭司としての働きを開始する年齢である。
 - ③「ヨセフの子と思われていた」(挿入句)
 - *ルカの福音書の読者は、ヨセフがイエスの義父であることを知っている。
 - *ヨセフに「定冠詞」が付いていない。
 - *学者の説明では、「定冠詞」がない場合は、系図から外れている。
 - ④ヘリは、ヨセフの義父である。つまり、マリアの父である。

- (2) イエスのメシア性を証明するための系図である。
 - ①イエスは、肉体的にマリアの子である。
 - ②ルカ1:32に暗示がある(マリアもダビデの子孫)。
「**その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります**」
 - ③ルカ2:5に暗示がある(マリアもダビデの子孫)。
「**身重になっているいいなずけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった**」
 - ④イエスは、肉体的にアブラハム、ダビデの子孫である。

II. なぜ時間軸が逆なのか。

1. マタイの福音書

(1) アブラハムから始まり、イエス・キリストに至る。

①ユダヤ人読者のために書かれた福音書

(2) 旧約聖書の要約であり、マタイの福音書のイントロダクションである。

①異邦人には難解である。

②ユダヤ人には、イエスのメシア性を証明する系図である。

2. ルカの福音書

(1) イエスから始まり、アダムに至る。

①一般人のために書かれた福音書

III. 登場する人数は正確か。

1. マタイの福音書

(1) 17節

「それで、アブラハムからダビデまでの代が全部で十四代、ダビデからバビロン移住までが十四代、バビロン移住からキリストまでが十四代になる」

① $14 \times 3 = 42$ であるが、登場するのは41人である。

(2) マタイによる要約

①マタイは、42人とは言っていない。

②キリストの系図を3つに区分し、記憶しやすいようにした。

③区切りは、ダビデ(人物)とバビロン捕囚(出来事)である。

④第一区分は、アブラハムからダビデまでで、14代(14人)ある。

⑤第二区分は、ダビデからバビロン捕囚までで、14代ある。

*ダビデの名は第一区分の最後と、第二区分の最初に出る。

*第二区分の最後の人物は、ヨシヤである。

*ダビデを除くと13人である。

⑥第三区分は、エコニヤからキリストまでで、14代ある。

*エコニヤは第三区分の最初で一度だけ数える。

(3) マタイによる省略

- ①「ヨラムにウジヤが生まれ」(8節)
 - *ヨラムとウジヤの間に省略がある。
- ②「ヨシヤに、エコニヤとその兄弟たちが生まれ」(11節)
 - *ヨシヤとエコニヤの間に省略がある。
- ③旧約聖書では、系図の省略は一般的であった。
- ④「ゲンナオウ」というギリシア語の動詞(英語で beget)
 - *「もうけた」(新共同訳)が正確な訳である。
 - *直系を指す動詞である。
- ⑤マタ1:1の比較
 - 「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」(新改訳)
 - 「アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図」(口語訳)
 - 「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」(新共同訳)

2. ルカの福音書

- (1) イエスからアダムまで、77人が登場する。
 - ①ルカは表明していないが、7人×11区分という編集意図がある。
 - ②上から順に見てみると、区分の終わりか初めに重要な人物が登場している。
 - ③アブラハムは、3区分目の最後に登場。
 - ④ダビデは、5区分目の最後に登場。
- (2) ルカもまた、既存の系図を利用して、自らの意図に沿って編集した。

IV. なぜ女性の名前が含まれているのか。

1. マタイの福音書

- (1) ユダヤ人の系図には、通常は女性の名は入らない。
 - ①4人の女性は、41人の中には含まれていない。
- (2) マタイは、ある意図をもって4人の女性の名前を登場させた。
 - ①旧約聖書を知っているユダヤ人対象
 - ②3人は、重大な罪を犯した女性である。
 - ③1人は、異邦人の女性である。

2. ルカの福音書

- (1) この系図は、マリアの側の系図である。
- ①しかしルカは、男性の名を出すことによって、極端な逸脱を回避している。
 - ②ヨセフとヘリは、義理の親子関係にある。
 - ③イエスは、「ヘリの子」とも言える。

結論：

1. 恵みの要素 (1) マタイの系図にある4人の婦人の登場

(1) タマル (創38章)

- ①ユダの長子エルの妻となった。
- ②エルが死ぬと、弟オナンの妻となった。
- ③オナンが死ぬと、弟シェラが成人するまで実家に帰された。
- ④遊女を装って舅のユダと結ばれ、ペレツとゼラフという双子を産んだ。

(2) ラハブ (ヨシ2章、6章)

- ①城壁の中に家を持つエリコの遊女。
- ②ヨシュアが遣わした2人の斥候をかくまい、窓からつり降ろして助けた。
- ③イスラエルがエリコに侵入する時、いのちを助けてもらうという約束を得た。
- ④ヨシュアは、その約束を守り、ラハブ一族を助けた。

(3) ルツ (ルツ記)

- ①モアブの女
- ②ベツレヘムから逃れてきたエリメレクとナオミの子マフロンと結婚した。
- ③義父エリメレクと夫マフロンが先に死んだ。
- ④故郷に帰るといふナオミに従ってベツレヘムに行く決心をした。
- ⑤落ち穂を拾っていた時にエリメレクの親族の一人であるボアズと知り合った。
- ⑥ボアズはエリメレクの土地を買戻し、ルツと結婚をした。
- ⑦エッサイの父であるオベデが生まれた。
- ⑧エッサイからダビデが生まれた。

(4) ウリヤの妻 (2サム11~12章)

- ①ヘテ人ウリヤの妻、バテ・シェバ
- ②夫ウリヤが戦場にいる時ダビデ王に召し入れられて妊娠した。
- ③ダビデは、その隠蔽のためにウリヤを戦場で殺害した。
- ④その後バテ・シェバは、妻として王宮に迎え入れられた。

⑤後にソロモンを産んだ。

2. 恵みの要素 (2) ルカの系図で、イエスからアダムまで遡っていること

(1) イエス・キリストが全人類の救い主であることを示している。

(2) 逆に見ると、アダムが初めであり、イエスが最後である。

①最初のアダムは、不従順なアダム。

②最後のアダムは、従順なアダム。

(3) イエスを信じる時、私たちは、最後のアダムにつながるのである。

「ヨハネ誕生の告知」

ルカ 1 : 5～25

1. はじめに

(1) 4つの福音書を並べ、時間順にメシアの生涯を追って行く。

- ① 前回は、2つのメシアの系図を見た。
- ② マタイの系図は、ヨセフの家系
- ③ ルカの系図は、マリアの家系

(2) 3つの告知

- ① ザカリヤへの告知 (ルカ)
- ② マリアへの告知 (ルカ)
- ③ ヨセフへの告知 (マタ)

(3) マタイにある告知の特徴

- ① 公の情報
- ② 天使は、「主の使い」と呼ばれている。
- ③ ヨセフの視点から書かれている。

(4) ルカにある告知の特徴

- ① 私的情報
- ② 天使は、「ガブリエル」と呼ばれている。
- ③ マリアの視点から書かれている。

* ルカは、マタイにある告知の内容を知っていた。

* マリアから直接情報を得たか、マリアに近い人々から情報を得たか。

* ルカはヘブル語(アラム語)の資料を利用している(1:1～4とは異なる)。

* ルカ1章と2章は、新約聖書の中で最も古いものである。

* マリアの福音書、バプテスマのヨハネの福音書、などと呼ばれる。

2. アウトライン

- (1) 背景(舞台) (5～7節)
- (2) 告知 (8～20節)
- (3) 人々の驚き (21～23節)
- (4) 「約束」の成就 (24～25節)

3. メッセージのゴール

- (1) 歴史的枠組み
- (2) 旧約聖書の成就
- (3) 聖霊の働き

このメッセージは、ヨハネ誕生の告知から、福音の始まりについて学ぼうとするものである。

I. 背景(舞台)(5~7節)

1. 5節

「ユダヤの王ヘロデの時に、アビヤの組の者でザカリヤという祭司がいた。彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった」

(1) 「ユダヤの王ヘロデ」

- ①「ユダヤ」は、広義の意味である。ユダヤ人の土地。
- ②ローマの行政区としては、ユダヤ、サマリヤ、ガリラヤ。

(2) ザカリヤという祭司

- ①ダビデによって、祭司制度が確立した。
- ②祭司は24の組に分けられた。
- ③アビヤの組は、8番目に当たる(1歴24:10)。
- ④3つの巡礼祭では、祭司全員が奉仕に当たった。
- ⑤それ以外の時は、毎年、1週間の奉仕を2回行った。
- ⑥当時は、1万8千人の祭司がいたと言われている。

*750人/組

*くじに当たる確率。20年×14日×2=560

*560人は1回は当たるが、190人は当たらないで祭司の仕事を終える。

(3) 妻エリサベツ

- ①アロンの子孫。つまり、祭司家系の娘である。
- ②ユダヤ教の伝統によれば、祭司は祭司の娘と結婚するのがいいとされた。

2. 6節

「ふたりとも、神の御前に正しく、主のすべての戒めと定めを落度なく踏み行っていた」

- (1) パリサイ人との違い。
 - ①人の前での外見的義

- ②神の前での内面的義
- ③彼らは、旧約時代の義人である。

(2) 旧約聖書と新約聖書の論理的一貫性

- ①パリサイ派の信仰を旧約聖書の教えと思ってはならない。
- ②イエスは旧約聖書を成就するために来られたのである。

3. 7節

「エリサベツは不妊の女だったので、彼らには子がなく、ふたりとももう年をとっていた」

(1) 不妊の女の例

- ①アブラハムとサラ
- ②ヤコブとサラ
- ③サムソンの両親(マノアと無名)
- ④サムエルの両親(エルカナとハンナ)

(2) 年を取っていた。

- ①人間的希望がない状態
- ②これから起こることは、神の業である。

II. 告知(8~20節)

はじめに(旧約聖書のパターンが見られる)

- ①天使の出現
- ②見た人の恐れ
- ③励ましの言葉(恐れるな)
- ④神からのメッセージ
- ⑤不信仰の言葉とするしの要求
- ⑥神からのしるし

1. 天使の出現(8~11節)

「さて、ザカリヤは、自分の組が当番で、神の御前に祭司の務めをしていたが、祭司職の習慣によって、くじを引いたところ、主の神殿に入って香をたくことになった。彼が香をたく間、大ぜいの民はみな、外で祈っていた。ところが、主の使いが彼に現れて、香壇の右に立った」

(1) くじが当たった。

①彼の生涯で最良の日となった。750人の中から選ばれた。

②くじは、神の御心を表現するものである。

③使1:26で、マッテヤが使徒に選ばれている。

④「神殿」とは、聖所のことである。

⑤祭司は、香の壇を掃除し、新しく香をたく。

⑥香は祈りの象徴である。

⑦外でイスラエルの民が祈っている。

*個人的祈り

*共同体としての、終末的祈り。メシア時代の到来を願う祈り。

⑧そして今、ゼカリヤがその祈りの頂点に立っている。

(2) 天使が現れた。

①これだけでも、恐れの原因になる。

2. 見た人の恐れ (12 節)

「これを見たザカリヤは不安を覚え、恐怖に襲われたが、」

(1) ユダヤ人にとっては、一般的な反応である。

①それ以上に、ユダヤ教の伝承の問題がある。

(2) 「香壇の右に立った」 (11 節)

①レビ 10 : 1~2

「さて、アロンの子ナダブとアビフは、おのおの自分の火皿を取り、その中に火を入れ、その上に香を盛り、主が彼らに命じなかった異なった火を【主】の前にささげた。すると、【主】の前から火が出て、彼らを焼き尽くし、彼らは【主】の前で死んだ」

②ユダヤ教の伝承の中で、裁きの天使は香壇の右に立つと言われていた。

3. 励ましの言葉 (恐れるな) (13 節 a)

「御使いは彼に言った。『こわがることはない。ザカリヤ。あなたの願いが聞かれたのです』」

(1) 良い知らせを持ってきたのだから、恐れなくてもいい。

(2) 願いが聞かれた。

①個人的願い (息子の誕生。昔祈った内容)

②公の願い (メシア時代の到来)

③この2つの願いが、ヨハネの誕生というひとつの出来事を通して聞かれる。

4. 神からのメッセージ (13b~17節)

「あなたの妻エリサベツは男の子を産みます。名をヨハネとつけなさい。その子はあなたにとって喜びとなり楽しみとなり、多くの人もその誕生を喜びます。彼は主の御前にすぐれた者となるからです。彼は、ぶどう酒も強い酒も飲まず、まだ母の胎内にあるときから聖霊に満たされ、そしてイスラエルの多くの子らを、彼らの神である主に立ち返らせませす。彼こそ、エリヤの霊と力で主の前ぶれをし、父たちの心を子どもたちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです」

(1) 老年になったエリサベツが息子を生む。

- ①神の介入が始まる。
- ②名をヨハネと付ける (ヤハウエは恵み深いという意味)。
- ③彼は、終末的喜びをもたらす。
- ④主の前にすぐれた者となる。後から誕生する者が、さらに偉大である。

(2) ヨハネの特徴

- ①ぶどう酒も強い酒も飲まない。
 - *ナジル人のライフスタイル (民6:3)
- ②彼の伝えるメッセージの緊急性を示す。
 - *エリヤのようなライフスタイルも目的は同じである。
- ③聖霊に満たされる。
 - *母の胎内にあるときから
 - *生涯この状態が続いた。

(3) ヨハネの働きの内容

- ①イスラエルの民を神である主に立ち返らせる。
- ②エリヤのような風貌と力 (聖霊による) で、奉仕をする。
- ③父たちが愛をもって子どもたちに関心を払うようになる。
- ④神に反抗する者たちに悔い改めを与える。
- ⑤メシア到来の準備をする。

5. 不信仰の言葉としての要求 (18節)

「そこで、ザカリヤは御使いに言った。『私は何によってそれを知ることができましょうか。私ももう年寄りですし、妻も年をとっております』」

(1) 不信仰の言葉

①私も妻も、年を取っている。

(2) 何によってそれを知ることができるか。

①しるしの要求

②創15:8(カナンの地の約束)

「彼は申し上げた。『神、主よ。それが私の所有であることを、どのようにして知ることができましょうか』」

6. 神からのしるし(19~20節)

「御使いは答えて言った。『私は神の御前に立つガブリエルです。あなたに話をし、この喜びのおとずれを伝えるように遣わされているのです。ですから、見なさい。これらのことが起こる日までは、あなたは、ものが言えず、話せなくなります。私のことばを信じなかったからです。私のことばは、その時が来れば実現します』」

(1) 権威の証明

①ガブリエルという名前を明かす。

*一般の天使の中で、ガブリエルとミカエルのみ名前が知られている。

*これ自体が、権威の証明である。

②神の御前に立つ

(2) 派遣の目的

①喜びのおとずれを伝える。

②終末的喜びである。

③ヨハネの誕生は、その始まりである。

(3) しるし

①ものが言えなくなること

②耳も聞こえなくなった(62節)。

③これは、叱責をともなった「しるし」である。

III. 人々の驚き(21~23節)

1. 21~22節

「人々はザカリヤを待っていたが、神殿であまり暇取るので不思議に思った。やがて彼は出て来たが、人々に話すことができなかった。それで、彼は神殿で幻を見たのだとわかっ

た。ザカリヤは、彼らに合図を続けるだけで、口がきけないままであった」

(1) 「不思議に思う」は、ギリシア語で「サウマゾウ」という動詞。

①奇跡を見て驚く時に使う動詞

(2) ザカリヤが出てきたが、話すことができなかった。

①祭司は、聖所から出ると祝福の祈りを捧げる。

*民6：24～26

②それができないので、聖所で幻を見たのだと判断した。

③ザカリヤは身振りをするだけで、説明はできなかった。

2. 23 節

「やがて、務めの期間が終わったので、彼は自分の家に帰った」

(1) 家はユダの山地にあった。

①現在のエンカレム。

②徒歩で半日くらいか。

IV. 「約束」の成就 (24～25 節)

1. 24～25 節

「その後、妻エリサベツはみごもり、五か月の間引きこもって、こう言った。『主は、人中で私の恥を取り除こうと心にかけて、今、私をこのようにしてくださいました』」

(1) エリサベツは妊娠した。

①5ヶ月間ひきこもった。

②天使から聞いた内容は、家族内の秘密となっていた。

③エリサベツは、知っていた。

④この情報を最初に聞いたのは、マリアであろう。

(2) 不妊の女の喜び

①創30：23～24 (ラケルの喜び)

「彼女はみごもって男の子を産んだ。そして『神は私の汚名を取り去ってくださいました』と言って、その子をヨセフと名づけ、『【主】がもうひとりの子を私に加えてくださるように』と言った」

結論：

1. 歴史的枠組み

(1) ヨハネの誕生は、歴史的枠組みの中で成就した。

- ①「昔々」ではない。
- ②ルカは歴史家である。

(2) 時、場所、人を見てみよう。

- ①時は、ヘロデ大王の時代(前37～4年)である。
- ②場所は、エルサレムであり、神殿の中である。
- ③人は、老夫婦のザカリヤとエリサベツである。

2. 旧約聖書の成就

(1) 当時のユダヤ人の精神状態

- ①預言者がいなくなって、神は約400年間沈黙された。
- ②ユダヤ人たちは、律法と預言者たちの時代を懐かしんでいた。
- ③メシア時代の到来を待ち望んでいた。

(2) ザカリヤとエリサベツは、イスラエルの残れる者(レムナント)である。

- ①律法による義ではなく、信仰による義である。
- ②その結果、モーセの律法に信仰によって応答していた。
- ③彼らもまた罪人であるが、罪が覆われる方法を知っていた(いけにえ)。

(3) 神は、レムナントを用いて、メシア時代を歴史に導入された。

- ①私たちにも、希望がある。

3. 聖霊の働き

(1) バプテスマのヨハネは、聖霊に満たされていた。

- ①胎内にいる時から
- ②先駆者としての働きを推進する力

(2) 「聖霊に満たされる」とは、聖霊の支配に服していること。

- ①ペンテコステ以降の聖霊の働きは、より素晴らしいものとなった。
- ②聖霊のバプテスマ(キリストの教会の一員となっている)
- ③信者の心に内住される聖霊

「イエス誕生の告知」

ルカ 1：26～38

1. はじめに

(1) 3つの告知

- ①ザカリヤへの告知（ルカ）
- ②マリアへの告知（ルカ）
- ③ヨセフへの告知（マタ）

(2) ルカにある告知の特徴

- ①私的情報
- ②天使は、「ガブリエル」と呼ばれている。
- ③マリアの視点から書かれている。

(3) ザカリヤへの告知とマリアへの告知には、相関関係がある。

- ①構成方法が似ている。
- ②内容が似ている。

2. アウトライン

(1) 背景（舞台）（26～27節）

(2) 告知（28～38節）

- *旧約聖書のパターンが見られる。
- *それをモデルとして最初の告知が書かれた。
- *最初の告知をモデルとして次の告知が書かれた。

- ①天使の出現
- ②見た人の恐れ
- ③励ましの言葉（恐れるな）
- ④神からのメッセージ
- ⑤不信仰の言葉とするしの要求
- ⑥神からのしるし

3. メッセージのゴール

- (1) マリアに関する誤解
- (2) 処女降誕の重要性

このメッセージは、イエス誕生の告知から、メシアについて学ぼうとするものである。

I. 背景(舞台)(26~27節)

1. 26節

「ところで、その六か月目に、御使いガブリエルが、神から遣わされてガリラヤのナザレという町のひとりの処女のところに来た」

(1) エリサベツが妊娠6ヶ月を迎えた時

①これもまた、2つの告知物語を関連させる言葉である。

(2) ガリラヤのナザレという町

①異邦人で、パレスチナの地理を知らない人のために書かれている。

②前回の舞台は、エルサレムの神殿であり、ユダの山地であった。

③ますます、あり得ない事が始まろうとしているという雰囲気である。

④ナザレは、旧約聖書にも、タルムードにも出てこない町である。

(3) ひとりの処女

①今回の主人公

②天使ガブリエルの再登場

2. 27節

「この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいなずけで、名をマリヤといった」

(1) 処女の名は、マリア。

①ヘブル語でミリアムである。

②当時の女性の婚約年齢は、13歳くらい。15歳を超えることはないだろう。

(2) 当時のユダヤ人の結婚の習慣

①花婿の父親が、嫁を探すところから始まる(息子の意見は、多少反映される)。

②いい娘がいたら、その父親に申し込みをする(娘の意見は無視される)。

③正式な合意があれば、花嫁の父親に花嫁料を払う。

④花婿が同意書を出し、正式な婚約関係が成立する。

⑤同居は、さらに1年ほど先のことになるが、法的には結婚関係とみなされる。

⑥もし花嫁が他の男と関係を持てば、姦淫の罪を犯したことになる。

⑦婚約関係の破棄は、離婚によってのみ可能になる。

(3) ダビデの家系のヨセフ

- ①マタイの福音書の系図で、ヨセフがダビデの家系であることを確認した。
- ②ルカの福音書の系図では、マリアもまたダビデの家系である。
- ③メシア誕生の前提条件である。

II. 告知 (28～38 節)

1. 天使の出現 (28 節)

「御使いは、入って来ると、マリヤに言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたとともにおられます』」

(1) 同じ天使ガブリエルが登場している。

- ①ザカリヤの場合よりも、記述が単純である。

(2) 「おめでとう、恵まれた方」

- ①「おめでとう」は、シャロームであろう。
- ②マリアが選ばれたのは、100 パーセント神の恵みである。
- ③マリアの側に何かの理由があったわけではない。
- ④英語で「highly favored one」である。
- ⑤カトリックのブルガタ訳 (ラテン語訳) では、「full of grace」になっている。

2. 見た人の恐れ (29 節)

「しかし、マリヤはこのことばに、ひどくとまどって、これはいったい何のあいさつかと
考え込んだ」

(1) ザカリヤとマリアの違い

- ①ザカリヤの場合は、「不安を覚え、恐怖に襲われた」(12 節) とあった。
- ②マリアの場合は、「とまどって、考え込んだ」とある。

3. 励ましの言葉 (恐れるな) (30 節)

「すると御使いが言った。『こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです』」

(1) ザカリヤとマリアの違い

- ①ともに、「こわがることはない」で始まる。
- ②ザカリヤの場合は、願いが聞かれたという言葉が続く。
- ③マリアの場合は、「あなたは神から恵みを受けたのです」となる。

*メシアの母となる特権

4. 神からのメッセージ (31~34節)

(1) 31節

「ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい」

①天使は、イザ7:14をほぼそのまま引用している。

「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける」

②ザカリヤにはヨハネという名が、マリアにはイエスという名が示された。

③イエスは、「イエシュア」(主は救い)である。

*ルカの福音書でこの名は初めて登場。

*ユダヤ人伝道では「イエス (Jesus)」より「イエシュア (Yeshua)」使用。

(2) 32~33節

「その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません」

①「すぐれた者となり」

*偉大な者となる。

*ヨハネの場合は、「主の御前にすぐれた者となる」(15節)であった。

*イエスの優位性が示されている。

②「いと高き方の子と呼ばれます」

*ヘブル語で「ハ・エルヨン」(神の御名)である。

*ヘブル語的には、子とは父と同等である(子は父のコピーである)。

*イエスの神性が示されている。

③「父ダビデの王位をお与えになります」

*2サム7:12~17にあるダビデ契約の成就。

*イエスがユダヤ人のメシアとして来られたことを示している。

④「彼はとこしえにヤコブの家を治め、」

*ヤコブの家とは、イスラエルの民である。

*これもまた、イエスがユダヤ人のメシアであることを示している。

⑤「その国は終わることがありません」

*イエスの再臨と千年王国(メシア的王国)出現によって、成就する。

5. 不信仰の言葉としるしの要求 (34節)

「そこで、マリヤは御使いに言った。『どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知らないのに』」

(1) ザカリヤとマリアの違い

- ①ザカリヤの場合は、不信仰の言葉を語った。
- ②マリアの場合は、どうしたらそれが実現するのかを尋ねている。

(2) 「男の人を知らないのに」

- ①知るとは、体験すること。
- ②ヨセフと実質的な結婚生活に入っていない。
- ③ヨハネの誕生は奇跡的なことであったが、イエスの誕生はそれ以上のもの。
- ④ザカリヤへの告知とマリアへの告知は、ここで大きく道が分かれる。

6. 神からのしるし (35～38 節)

(1) 35 節

「御使いは答えて言った。『聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます』」

- ①ヘブル的対句法がある。
 - *聖霊があなたの上に臨み、
 - *いと高き方の力があなたをおおいます。
- ②もうひとつのヘブル的対句法がある。
 - *聖なる者、
 - *神の子と呼ばれます。
- ③異教の神話にあるような、神と人との結婚ではない。

(2) 36～37 節

「ご覧なさい。あなたの親類のエリサベツも、あの年になって男の子を宿しています。不妊の女といわれていた人なのに、今はもう六か月です。神にとって不可能なことは一つもありません」

- ①マリアに「しるし」が与えられた。
 - *願っていないのに。
 - *この「しるし」には、叱責の意味はない。
- ②親戚のエリサベツの妊娠が、「しるし」である。
- ③神には不可能はない (エリサベツ以外にも、先例がある)。
- ④創 18 : 14
 - 「【主】に不可能なことがあろうか。わたしは来年の今ごろ、定めた時に、あなた

のところに戻って来る。そのとき、サラには男の子ができています」

(3) 38 節

「マリヤは言った。『ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように』。こうして御使いは彼女から去って行った」

①少女マリヤの信仰は、信者の模範である。

*払うべき犠牲の大きさを知りながら、従順に従った。

(例話) 今日のメシアニック・ジュー

②天使は、その使命を終えた。

結論：

1. マリアに関する誤解

(1) 無原罪の御宿り (Immaculate Conception)

①イエスのことではなく、マリヤの誕生に関することである。

②マリヤは、神から恵みを受け、特別な方法で用いられた。

③しかし、マリヤもまた罪赦された罪人であった。

④マリヤは、十字架のそばに立っていた (ヨハ 19 : 25)。

⑤マリヤは、聖霊降臨の前に、使徒たちとともに祈っていた (使 1 : 14)

(2) マリアの処女性

①マリヤは、イエスを宿す前も後も、処女であった。

②しかし、イエスを出産してからは、ヨセフとの結婚関係に入った。

③マタ 1 : 25

「そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた」

④マタ 13 : 55

「この人は大工の息子ではありませんか。彼の母親はマリヤで、彼の兄弟は、ヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではありませんか」

(3) マリアの偶像化

①ルカ 11 : 27~28

「イエスが、これらのことを話しておられると、群衆の中から、ひとりの女が声を張り上げてイエスに言った。『あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです』。しかし、イエスは言われた。『いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそ

『れを守る人たちです』

- ②マリアは、ペンテコステ以降は登場しない。
- ③マリアの死や、昇天については何も書かれていない。
- ④マリアが祈りの仲介者であることも書かれていない。

2. 処女降誕の重要性

(1) 字義通りに読むことが重要である。

- ①受肉の出来事には、このような奇跡がともなうことは当然である。

(2) イエスの2面性(神性と人間性を持つ)

- ①イエスは、初めから神である。
- ②イエスは、マリアから人間性を得た。

(3) 原罪

- ①通常の結婚ではない。私たちは、両親から原罪を継承している。
- ②マリアの原罪は、継承しなかったのか。
- ③35節

「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます」

- ④聖霊による処女懐胎は、原罪を持たない人間の誕生に必要なものであった。

(4) 最後のアダム

- ①1コリ 15:22

「すなわち、アダムにあってすべての人が死んでいるように、キリストによってすべての人が生かされるからです」

- ②1コリ 15:45

「聖書に『最初の人アダムは生きた者となった』と書いてありますが、最後のアダムは、生かす御霊となりました」

「マリアのエリサベツ訪問」 ルカ1:39～45

「マリアの賛歌」 ルカ1:46～56

1. はじめに

(1) 受胎告知を受けたマリアのその後の行動

① エリサベツを訪問

② エリサベツと胎内の子の反応

* エリサベツの預言的言葉

* マリアの賛歌 (マグニフィカート。ラテン語訳の最初の言葉)

③ 今回は、2つのセクションを同時に取り上げる。

2. アウトライン

(1) マリアのエリサベツ訪問 (39～45 節)

① 訪問の情景 (39～42a 節)

② エリサベツの預言的言葉 (42b～45 節)

(2) マリアの賛歌 (46～56 節)

① マリア自身が受けた祝福 (46～50 節)

② イスラエルの民が受けた祝福 (51～56 節)

3. メッセージのゴール

(1) イエスとヨハネの対比

(2) 信者の手本としてのマリア

(3) 約束と預言の成就

(4) 逆転の真理

このメッセージは、メシアの本質について学ぼうとするものである。

§6 マリアのエリサベツ訪問 (39～45 節)

I. 訪問の情景 (39～42a 節)

1. マリアの行動

(1) 受胎告知からさほど時間が経たない内に、マリアはエリサベツを訪問した。

① ユダの山地にある町

② 紀元6世紀以降は、この町はエン・カレムと特定されている。

③ナザレからの距離は、約160キロ。徒歩で4日前後かかる。

(2) なぜエリサベツを訪問したのか。

①ナザレを逃れるため？

②妊娠したことを別の地で確認するため？

③エリサベツの助言を受けるため？

④天使から聞いた「しるし」に応答するため？

*マリアは喜んで旅をしたのであろう。

(3) ザカリヤの家に行って、エリサベツにあいさつした。

①ザカリヤは、まだ耳が聞こえず、口もきけなかった。

2. マリアのあいさつへの応答

(1) 先ず、エリサベツの胎内にいる子が応答した。

①胎内にいる時から、メシアの先駆者としての役割を果たしている。

②すでにマリアの胎内には子が宿っている。

(2) エリサベツは、聖霊に満たされ、大声を上げた。

①エリサベツの胎内にいる子とエリサベツが、メシアを認識した最初の人である。

②聖霊に満たされるという意味

*ペンテコステ以前は、特定の目的のために聖霊の支配(力)を受ける。

*ペンテコステ以降は、信者の内に聖霊が住まわれる。

*満たされるとは、聖霊の支配のことである。

③大声で語るとは、預言的言葉である。

II. エリサベツの預言的言葉(42b~45節)

1. 42節b

「あなたは女の中の祝福された方。あなたの胎の実も祝福されています」

(1) これは対句法である。

①マリアの賛歌もそうであるが、非常にヘブル的である。

②「女の中の祝福された方」とはヘブル的表現。「非常に祝福されている」。

(2) 「胎の実」とは胎内の子のことである。

- ①胎の実が祝福されているがゆえに、彼女は「女の中の祝福された方」である。
- ②当時は、女性の偉大さは、どのような子を産んだかによって決まった。

2. 43 節

「私の主の母が私のところに来られるとは、何ということでしょう」

- (1) 焦点はマリアではなく、胎内の子に合わせられている。

- ①マリアは、彼女自身の偉大さのゆえではなく、胎内の子のゆえに尊い存在。

- (2) 「私の主の母」

- ①イエスは誕生の前から、「私の主」と呼ばれている。

- ②エリサベツはマリアの胎内に宿っている子を「私の主」と認識した。

- ③その認識が広く認められるようになるのは、使2:36。

「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」

3. 44～45 節

「ほんとうに、あなたのあいさつの声が私の耳に入ったとき、私の胎内で子どもが喜んでおどりました。主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう」

- (1) エリサベツの子は、胎児の時からメシアの先駆者としての使命を果たしている。

- ①その子は、喜んで使命を果たしている。「喜んでおどりました」

- ②成人したヨハネの言葉。ヨハ3:29

「花嫁を迎える者は花婿です。そこにおいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです」

- (2) マリアは、「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人」である。

- ①ザカリヤとの比較。ルカ1:20

「ですから、見なさい。これらのことが起こる日までは、あなたは、ものが言えず、話せなくなります。私のことばを信じなかったからです。私のことばは、その時が来れば実現します」

§7 マリアの賛歌 (46～56 節)

I. マリア自身が受けた祝福 (46～50 節)

1. ハンナの祈りが背景にある (1サム2:1～10)。

「ハンナは祈って言った。『私の心は【主】を誇り、私の角は【主】によって高く上がりま
す。私の口は敵に向かって大きく開きます。私はあなたの救いを喜ぶからです』 (1 節)

(1) 不妊の女であったハンナは、主に願ってサムエルを得た。

①サムエルとは、「神が聞いてくださった」という意味。

②本来は子を宿さない処女が子を宿したことの中に、ハンナとの関連性がある。

2. 46～48 節

「マリヤは言った。『わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたた
えます。主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これか
ら後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう』

(1) 対句法が見られる。

①「わがたましい」も「わが霊」も「私」という意味。

②「主」と「救い主なる神」とは同じ意味。

③旧約聖書の「ヤハウエ」は新約聖書の「キュリオス」である。

(2) マリアが主をたたえている理由

①自分取るに足りない者であるとの自己認識。

②メシアを胎内に宿したのは、100%神の恵みによる。

③神の恵みを受けた者として、自分は「しあわせ者」である。

3. 49～50 節

「力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、そのあわれみは、
主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます」

(1) 「大きなこと」とは、単に処女懐胎のことではない。

①メシア到来の出来事に自分が参加させられていること。

(2) 「その御名は聖く」とは、「そのお方は聖いお方である」という意味。

①これは、道徳的聖さだけでなく、契約に基づく約束に忠実であることを示す。

(3) 詩103:17が背景にある。

「しかし、【主】の恵みは、とこしえから、とこしえまで、主を恐れる者の上にある。

主の義はその子らの子に及び、

①マリアの賛歌は、ヘブル的であり、旧約聖書の影響を受けている。

II. イスラエルの民が受けた祝福 (51～56 節)

1. 51～53 節

「主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました」

(1) イエスの御業の預言である。

①ヘブル語の未来完了形 (まだ起こっていないが、神の視点からは完了した)。

(2) イエスは、この世に逆転をもたらす。

①心の思いの高ぶっている者、権力ある者、富む者は、辱めを受ける。

②低い者、飢えた者は、祝福を受ける。

③マリアはすでにそれを体験したが、これがイスラエルの民全体の体験となる。

2. 54～55 節

「主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもべイスラエルをお助けになりました。私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです」

(1) マリアは、イエスの御業を契約の成就と見た。

(2) アブラハムとその子孫への約束

①出2:24

「神は彼らの嘆きを聞かれ、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を思い起こされた」

②詩105:8～10

「主は、ご自分の契約をとこしえに覚えておられる。お命じになったみことばは千代にも及ぶ。その契約はアブラハムと結んだもの、イサクへの誓い。主はヤコブのためにそれをおきてとして立て、イスラエルに対する永遠の契約とされた」

3. 56 節

「マリヤは三か月ほどエリサベツと暮らして、家に帰った」

(1) エリサベツの出産を見届けてから帰宅したのであろう。

- ①自らの妊娠を確認する意味もあったか。
- ②安定期に入ってから移動したか。

結論：

1. イエスとヨハネの対比

- (1) キリスト論的認識がある。
- (2) イエスはヨハネよりも偉大である。
 - ①ヨハネはイエスに敬意を表した。
 - ②ヨハ1：8
「彼は光ではなかった。ただ光についてあかしするために来たのである」
- (3) エリサベツは、マリアが祝福された女であることを認めた。
 - ①イエスの偉大さを認めたということ。

2. 信者の手本としてのマリア

- (1) ザカリヤとマリアの対比
- (2) 信仰は、年数ではない。
- (3) マリアは、旧約聖書をよく知っていた。

3. 約束と預言の成就

- (1) マリアの信仰は、神の契約に対する信頼である。
- (2) 旧約聖書と新約聖書の連続性
- (3) 恵みの時代(教会時代)は、ペンテコステの日までは始まらない。
- (4) 福音書の時代は、律法の時代である。

4. 逆転の真理

- (1) イエスによってこの世の価値観が逆転する。
- (2) 高慢な者は低くされ、自らの貧しさを認識する者は高くされる。
 - ①山上の垂訓のことば
 - ②5000人のパンの奇跡
 - ③ルカ19：10
「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです」
 - ④最後の晩餐

「ヨハネの誕生」 ルカ1:57~80

1. はじめに

(1) ヨハネとイエスの対比

- ①誕生の告知
- ②実際の誕生物語
- ③神の約束が成就し、人々に喜びをもたらす。

(2) ヨハネよりもイエスの方が偉大である。

(3) ルカ1:36 マリアとエリサベツが親戚であるという意味。母方の親戚である。

2. アウトライン

(1) ヨハネの誕生 (57~58節)

(2) 割礼と命名 (59~66節)

(3) ザカリヤの賛歌 (67~79節)

(4) ヨハネの成長 (80節)

3. メッセージのゴール

(1) イエスとヨハネの対比

(2) 信者の手本としてのザカリヤ

(3) 日本人伝道のヒント

このメッセージは、ヨハネ誕生の意味について学ぼうとするものである。

I. ヨハネの誕生 (57~58節)

1. 57節

「さて月が満ちて、エリサベツは男の子を産んだ」

(1) 短くて簡潔な記述である。

(2) 「月が満ちて」

①創21:2~3 サラがイサクを生んだ。「神がアブラハムに言われたその時期に」

②ルカ2:6~7 「マリアは月が満ちて」

2. 58節

「近所の人々や親族は、主がエリサベツに大きなあわれみをおかけになったと聞いて、彼

女とともに喜んだ

- (1) 近所の人々や親族は、彼女とともに喜んだ。
 - ①イエス誕生の際には、羊飼いたちが喜んだ。
- (2) 文法的考察
 - ①主の業は終わっている。「大きなあわれみをおかけになった」(アオリスト形)
 - ②喜びは共有され、継続している。「彼女とともに喜んだ」(未完了形)

II. 割礼と命名 (59～66 節)

1. 59～61 節

「さて八日目に、人々は幼子に割礼するためにやって来て、幼子を父の名にちなんでザカリヤと名づけようとしたが、母は答えて、『いいえ、そうではなくて、ヨハネという名にしなればなりません』と言った。彼らは彼女に、『あなたの親族にはそのような名の人ひとりもいません』と言った」

- (1) 8日目の割礼 (創 21 : 4)
 - ①幼子は8日目に割礼を受けた。アブラハム契約のしるし。
 - ②イエスも8日目に割礼を受けた (ルカ 2 : 21)。
 - ③パウロの例 (ピリ 3 : 5)

「私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、」
 - ④この習慣は、今も続いている。
- (2) 命名
 - ①誕生直後の命名もある。
 - ②通常は、長男は祖父の名を受け継ぐ。
 - ③父の名は例外的なもの。その場合は、「ザカリヤ・ベン・ザカリヤ」となる。
- (3) 母 (エリサベツ) の拒否
 - ①非常に強い否定。「ウーキ」という言葉。
 - ②「ヨハネという名にしなればなりません」
 - ③どうして知っていたのか。夫ザカリヤから筆談で聞かされていたのであろう。
- (4) 人々の反対

- ①女性の言葉である。
- ②さらに、親族にそのような名の人がない。
 - *系図を意識している。
 - *先祖への敬意を表している。

2. 62～66節

「そして、身振りで父親に合図して、幼子に何という名をつけるつもりかと尋ねた。すると、彼は書き板を持って来させて、『彼の名はヨハネ』と書いたので、人々はみな驚いた。すると、たちどころに、彼の口が開け、舌は解け、ものが言えるようになって神をほめたたえた。そして、近所の人々はみな恐れた。さらにこれらのことの一部始終が、ユダヤの山地全体にも語り伝えられて行った。聞いた人々はみな、それを心にとどめて、『いったいこの子は何になるのでしょうか』と言った。主の御手が彼とともにあったからである」

(1) ザカリヤへの問いかけ

- ①身振り手振りで尋ねた。
- ②ザカリヤは一時的な聾啞状態にあった。

(2) ザカリヤの回答

- ①書き板とは、木の板にロウを被せたもの。通常は、鉄のペンを使用した。
- ②「その名はヨハネ」
- ③エリサベツが提案した名と同じなので、人々は驚いた。

(3) ザカリヤの癒し

- ①彼は、9か月間聾啞状態にあったが、それがたちどころに癒された。
- ②彼が最初にしたことは、神をほめたたえることである。

(4) 人々の反応

- ①恐れが人々を襲った。恐怖ではなく、畏怖の念である。
- ②噂がユダの山地全体に広がり、人々は互いにそれを話題にした。
- ③この子の将来を想像し、大きな期待を持った。
- ④マタ 3:5～6

「さて、エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン川沿いの全地域の人々がヨハネのところへ出て行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けた」

Ⅲ. ザカリヤの賛歌 (67～79節)

1. イントロダクション (67 節)

(1) 67 節

「さて父ザカリヤは、聖霊に満たされて、預言して言った」

①ザカリヤの賛歌を「ベネディクタス」(ラテン語)という。

②ギリシア語では、一つの長い文である。

③その内容は、詩篇や預言書からの引用で満ちている。

*彼は、メシア預言の成就を見ている。

④これは、聖霊に導かれて語っている預言である(以下の3点が含まれている)。

*将来の出来事を告げる。

*神を賛美する。

*神のことば(福音の正しい理解)を伝達する。

2. 呼びかけ (68 節 a)

(1) 68 節 a

「ほめたたえよ。イスラエルの神である主を」

①詩篇や預言書にたびたび登場する表現である。

②マリアの賛歌も、同様の言葉で始まっている。

③エペ1:3~10、2コリ1:3~4、1ペテ1:3~5

3. 主をたたえる理由 (68b~75 節)

(1) 68b~69 節

「主はその民を顧みて、贖いをなし、救いの角を、われらのために、しもべダビデの家に立てられた」

①未来完了形(マリアの賛歌と同じ)。預言的完了形である。

②「贖い」とは、政治的意味ではなく、霊的意味で用いられている。

③「救いの角」とは、メシアのことである。

*角を持った動物の力は、その角にある。

④メシアとは、ヨハネのことではなく、ダビデの家系から登場する。

⑤ザカリヤは、イエスとヨハネが同じ計画の2つの部分であることを理解した。

(2) 70~75 節

「古くから、その聖なる預言者たちの口を通して、主が話してくださったとおりに。この救いはわれらの敵からの、すべてわれらを憎む者の手からの救いである。主はわれらの父祖たちにあわれみを施し、その聖なる契約を、われらの父アブラハムに誓わ

れた誓いを覚えて、われらを敵の手から救い出し、われらの生涯のすべての日に、きよく、正しく、恐れなく、主の御前に仕えることを許される」

①イスラエルの民を解放するという預言の成就

*新しい宗教の創設ではない。

②「われらの敵」、「われらを憎む者」とは、政治的な敵ではない。

③アブラハムへの誓いの成就（創22：16～18）

「これは【主】の御告げである。わたしは自分にかけて誓う。あなたが、このことをなし、あなたの子、あなたのひとり子を惜しまなかったから、わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。あなたの子孫によって、地のすべての国々は祝福を受けるようになる。あなたがわたしの声に聞き従ったからである」

④ザカリヤは、以上のことを預言的完了形で語っている。

4. ヨハネの奉仕に関する預言（76～79節）

(1)76a節

「幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼ばれよう」

①ゼカリヤは、直接幼子に呼びかけている。

②「いと高き方の預言者」

(2)76b～79節

「主の御前に先立って行き、その道を備え、神の民に、罪の赦しによる救いの知識を与えるためである。これはわれらの神の深いあわれみによる。そのあわれみにより、日の出がいと高き所からわれらを訪れ、暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く」

①メシアの先駆者としての働き

②救いの内容を教える。

*罪の赦しによる救い。

*メシアは政治的メシアではない。

*これが先駆者の究極的使命である。

③「日の出がいと高き所からわれらを訪れ」とは、メシアの到来のこと。

*イザ60：19参照

IV. ヨハネの成長（80節）

1. 80 節

「さて、幼子は成長し、その霊は強くなり、イスラエルの民の前に公に出現する日まで荒野にいた」

- ①ヨハネは、両親亡き後、ユダの山地近辺の荒野に住んだ。
- ②若い時から、エリヤ的生活を選んだ。彼の自己認識と関係がある。
- ③ルカ3:2につながる。

「アンナスとカヤパが大祭司であったころ、神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下った」

- ④ルカ2:40と似ている。
「幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちていった。神の恵みがその上にあった」
- ⑤2人の子どもは、30年後に同じ神の計画を進める働きに合流する。

結論：

1. イエスとヨハネの対比

(1) 2人の幼子は、ともに同じ神の計画を担う。

- ①ザカリヤは、ヨハネの誕生によって新しい時代が到来したことを知った。
- ②マリアは、イエスの誕生によって同じ確信を持った。

(2) イエスの優位性が強調されている。

①誕生物語の対比

- *ヨハネは1:57~58までの2節。
- *イエスは2:1~20までの20節。

②呼称の対比

- *ヨハネは「いと高き方の預言者」(1:76)である。
- *イエスは「神の子」(1:35)である。

③ヨハネをイエスと同列に論じてはならない。

2. 信者の手本としてのザカリヤ

(1) マリアは信者の理想的な手本である。

(2) ザカリヤは、信者の現実的な手本である。

- ①彼は、旧約的な意味での義人である。

- ②彼は、信仰によって救われている。
- ③しかし彼は、不信仰のゆえに聾啞状態に陥った。
- ④これは、救いの喪失ではなく、神からの訓練である。
- ⑤神のことばを認めた時に、聾啞状態から解放された。
- ⑥同じことが私たちに起こる。

*罪を犯すと、「信仰のことば」を失う。

*解決策は、1ヨハ1:9である。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」

(3) 日本人伝道のヒント

①1コリ1:21~24

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」

②違和感に満ちたルカの福音書の書き出し

*ユダヤ的雰囲気と背景

*イエス誕生とヨハネ誕生にまつわる神の奇跡的介入

③これらの要素は、聖書が教える救いが、私たちの常識的認識の延長線上にはないということを教えている。

④ユダヤ人たちは、メシアの到来と御国の時代の到来を待ち望んでいた。

⑤彼らの常識は、神の目からは非常識であった。

*救いとは、ローマの圧政からの解放を理解されていた。

*救いとは、霊的なもの、神との関係の回復である。

*敵とは、罪の性質、食欲、肉欲、自己中心性、サタン、悪霊などである。

*人間世界でのすべての対立を解決する鍵は、神との和解にある。

⑥伝達方法の工夫は必要であるが、福音の内容に関する工夫は不必要である。

「ヨセフへの告知」 マタイ1:18～25

1. はじめに

(1) ヨハネとイエスの対比（特にルカの福音書）

- ①誕生の告知
- ②実際の誕生物語
- ③神の約束が成就し、人々に喜びをもたらす。

(2) ヨセフの側から見た物語（マタイの福音書）

2. アウトライン

- (1) ヨセフの苦悩（18～19節）
- (2) 天使の御告げ（20～23節）
- (3) ヨセフの応答（24～25節）

3. メッセージのゴール

- (1) イエスという名の意味
- (2) インマヌエルという呼称の意味

このメッセージは、イエス誕生の意味について学ぼうとするものである。

I. ヨセフの苦悩（18～19節）

1. 18節

「イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった」

(1) イエス・キリスト（1節と同じ名称）

- ①ユダヤ人に対する情報である。
- ②メシアとして到来されたイエスは、ダビデの家系である。
- ③マタイは、イエスの誕生が超自然的なものであることを説明する。

(2) ユダヤ式結婚の習慣を知る必要がある（第7回目「イエス誕生の告知」参照）。

- ①今の私たちが「婚約」と言っている意味とは、異なる。

「その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが」（新改訳）

口語訳と新共同訳は、ともに「婚約していた」と訳している。

(3) ユダヤ式結婚の手順

- ①両親の合意で話が進められる。
- ②花嫁の父親に花嫁料を払った段階で、正式な準結婚関係が成立する。
- ③同居は、1年ほど先のことになるが、法的には結婚関係とみなされる。
- ④その期間は、花嫁が父に仕える期間である。
- ⑤また、花嫁の純潔が証明される期間でもある。
- ⑥もし花嫁が他の男と関係を持てば、姦淫の罪を犯したことになる。
- ⑦婚約関係の破棄は、離婚によってのみ可能になる。

(3) 実質的な結婚関係が始まらない内に、マリアは身重になった。

- ①聖霊によって。
 - *実に簡潔な記述である。
- ②これは、マリアの側の情報であって、ヨセフは事情を知らない。
- ③ヨセフはマリアを愛していたので、彼女の背信の行為のゆえに心が痛んだ。

2. 19節

「夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた」

(1) 「夫のヨセフは正しい人であって」

- ①まったく罪がないという意味ではない。
- ②旧約聖書的な意味での義人
- ③モーセの律法に従って生きているという意味である。
- ④彼もまた、イスラエルの残れる者(レムナント)である。

(2) ヨセフの選択肢

「彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた」(新改訳)
「彼女のことがかけになることを好まず、ひそかに離縁しようと決心した」(口語訳)
「マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した」(新共同訳)

- ①公にするか、個人的に解決するか。
- ②公にした場合は、マリアは石打の刑に処せられる可能性がある。

*町の門の所に座っている裁き人に訴え出る。

*申 22 : 23~24

「ある男と婚約している処女の娘がいて、別の男が町で彼女と出会い、床を

共にしたならば、その二人を町の門に引き出し、石で打ち殺さねばならない。
その娘は町の中で助けを求めず、男は隣人の妻を辱めたからである。あなた
はこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない」

- ③個人的に解決する場合は、2人の証人の前で離婚状を与える。
- ④ヨセフの場合は、正義よりも恵みが勝った。

(3) 神の苦しみとヨセフの苦しみ

- ①アブラハムがイサクを捧げた出来事
- ②預言者ホセアの召し

*神は、背信の妻イスラエルを不変の愛(ヘセッド)をもって愛し続けた。
*このメッセージは、ホセアの家庭的体験によって具体化された。
*彼は、「姦淫の女」ゴメルをめとれと命じられた。

II. 天使の御告げ(20~23節)

1. 20~21節

「彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなたに妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です』」

(1) 旧約時代によく起こる神の啓示法

- ①夢を通した啓示
- ②天使を通した啓示

(2) 「ダビデの子ヨセフ」

- ①イエスの義父は、メシアを排出する家系に属している。
- ②イエスは法的にもダビデの子孫である。

(3) メッセージの内容

- ①命令：恐れないうマリヤを妻として迎えよ。
- ②理由：胎内の子は聖霊によって身ごもったから。
- ③命令：生まれてくる男の子にイエスという名を付けよ。
- ④理由：イエスとは、「ヤハウエは救い」という意味である。
*バプテスマのヨハネの場合と同様に、神から名が与えられる。

*イエスがもたらす救いは、罪からの救いである。

2. 22～23 節

「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。『見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる』(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である)」

(1) これは、マタイによる解説である。

①ユダヤ人読者を意識している。

②イエスにおいて、ひとつの重要なメシア預言が成就した。

(2) イザ7:14

「それゆえ、主みずから、あなたがたに一つのしるしを与えられる。見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける」

①ヘブル語の「アルマー」は、乙女、若い娘のこと。

*この聖句を処女懐胎の預言とは見ない人たちがいる。

②マタイは、ギリシア語の「パーセノス」を使っている。

*これは、処女という意味である。

*当時は、乙女と言えば、処女のことである。

*紀元1世紀のユダヤ教は、イザ7:14を処女懐胎の預言と理解していた。

Ⅲ. ヨセフの応答 (24～25 節)

1. 24～25 節

「ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた」

(1) ヨセフの旧約聖書理解

①イエスという名の意味を理解した。

*詩130:8

「主は、イスラエルをすべての罪から贖ってください」(新共同訳)

*エレ31:31～37 新しい契約の約束

②イザ7:14の預言

(2) ヨセフは時を移さず、マリアと住むようになった。

①天使のこぼれを信じたということを示すため

②マリアを守るため

- (3) イエスが誕生するまで、実際の夫婦関係はなかった。
- (4) 「その子どもの名をイエスとつけた」
 - ①ルカ2:21によれば、それは生後8日目(割礼の日)に行われた。

結論：マタイは、ユダヤ人に対して2つのキーワードを示し、イエスのメシア性を証明しようとしている。

1. イエスという名の意味

- (1) ヘブル語でイエシュアという。
 - ①旧約聖書のヨシュアと同じである。
 - ②メシアとして誕生した方は、ごく普通のユダヤ人男子の名前を持った。
 - ③「ヤハウエは救い」「ヤハウエは救う」という意味である。
 - ④メシアがもたらす救いは、政治的な解放ではない。
 - ⑤それは、霊的な解放である。
- (2) ユダヤ人伝道とイエスという名
 - ①イエス(英語でJesus)という名は、ユダヤ人に忌み嫌われる。
 - ②ユダヤ人は、イエスという名によって迫害されてきた。
 - ③これは、ユダヤ人がかかわらない方がよい名である。
 - ④ユダヤ人伝道においては、イエシュアというヘブル名を使うのがよい。

2. インマヌエルという呼称の意味

- (1) これは、イエスの名ではなく、イエスの特徴を表現する呼称である。
 - ①その意味は、「神は私たちとともにおられる」ということ。
- (2) 処女懐胎したイエスは、神であり人である。
 - ①神が人間の世界(有限の世界)に介入された。
 - ②ヨハ1:14
「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた」
 - ③イエスは、私たちの苦悩と弱さを理解し、それを共有してくださる。
 - ④処女懐胎は、神が私たちに近づき、私たちに救うための神の方法である。

- * 「すべての道は同じゴールに到達する」というのは、真理ではない。
- * 神の方法によらねば、救いはない。

⑤マタイ 28 : 20b

「見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」

「イエスの誕生」 ルカ 2:1~7

1. はじめに

(1) ヨハネとイエスの対比 (特にルカの福音書)

- ①誕生の告知
- ②実際の誕生物語
- ③神の約束が成就し、人々に喜びをもたらす。

(2) マタイはイエスの誕生を簡単に扱っていた。

「ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ、そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた」(1:24~25)

(3) ルカは、詳細に記している。

2. アウトライン

- (1) 住民登録 (1~2 節)
- (2) ミカ書の預言の成就 (3~5 節)
- (3) イエスの誕生 (6~7 節)

3. メッセージのゴール

- (1) この箇所へのヘブル的解釈
- (2) 世界史の中のイエス誕生
- (3) 聖書の歴史観

このメッセージは、イエス誕生の意味について学ぼうとするものである。

I. 住民登録 (1~2 節)

1. 1 節

「そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た」

(1) 皇帝アウグスト (在位 27B. C. ~14A. D.)

- ①オクタヴィアヌスはその名である。
- ②彼は、ユリウス・カエサルの甥に当たる。
- ③カエサルの死後、ローマ帝国初代の皇帝となる。

④アウグストとは、称号である。

*前27年、元老院がこの称号を送る。

*「崇高なる者」、「大いなる者」の意味。

*8月をAugustという。

*前8年に、それまでの「Sextilis」(ラテン語)から「August」に変わった。

(2) 彼は、徴税のための住民登録を実行した。

2. 2節

「クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった」

(1) ルカの記述は不正確であるとの批判に会ってきた。

①クレニオがシリアの総督であったのは、紀元6年以降である。

②ルカの歴史家としての信憑性に関しては、結論の箇所論じる。

II. ミカ書の預言の成就 (3~5節)

1. 3節

「それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った」

(1) 「自分の町」の2つの意味

①ルカ2:39 「自分たちの町であるガリラヤのナザレ」

②先祖の町

(2) 「登録するために」

①家族ごとの戸籍が記されたパピルスが、エジプトで発掘されている。

2. 4~5節

「ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。彼は、ダビデの家系であり血筋でもあったので、身重になっているいなずけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった」

(1) ヨセフはダビデの家系に属している。

①ユダヤのベツレヘムに彼の本籍があったと思われる。

②2つのベツレヘム

*ナザレの北西11キロにある村。ゼブルン族の所有(ヨシ19:15)

*ユダヤのベツレヘム。エルサレムの南8キロにある町

(3) 「ダビデの町」

- ①旧約聖書では、エルサレムの南の地区を指す(ダビデが建てたエルサレム)。
- ②ルカの福音書では、ベツレヘムを指す。

(4) マリアが同行した理由は、いくつか考えられる。

- ①マリアもまたダビデの家系であったので、ベツレヘムで登録する必要があった。
- ②出産の時に、ヨセフがそばにいることを願った。
- ③ナザレでの噂話を避けるため。
- ④ミカ書の預言を意識していた。
- ⑤いずれにしても、ルカはこの背後の摂理が働いているのを見た。

(5) 「いいなずけの妻マリヤ」

- ①実質的な結婚関係はまだ始まっていない。

(6) ミカ 5:2 の成就

「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである」

Ⅲ. イエスの誕生 (6～7 節)

1. 6～7 節 a

「ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、男子の初子を産んだ」

(1) 「月が満ちて」

- ①ベツレヘムについてどれくらいの時間が経過したかは分からない。
- ②ルカ 1:57 との対比

「さて月が満ちて、エリサベツは男の子を産んだ」

2. 7 節 b

「それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである」

(1) 「布にくるんで」

- ①当時の習慣である。赤子の両腕が真っ直ぐに伸びるように。

②エゼ 16 : 4 (エルサレムに関する描写)

「あなたの生まれは、あなたが生まれた日に、へその緒を切る者もなく、水で洗ってきよめる者もなく、塩でこする者もなく、布で包んでくれる者もいなかった」

(2) 「飼葉おけに寝かせた」

- ①家畜(ろば、羊、山羊)に餌を与える場所
- ②それが、メシアの揺りかごとになった。
- ③家畜はその周りにはいない。
- ④これらの厳密な描写は、後に登場する羊飼いたちにとって重要な情報となる。

(3) 「宿屋には彼らのいる場所がなかったからである」

- ①「客間には彼らのいる余地がなかったからである」(口語訳)
- ②ホテル(宿屋)に空き部屋がなかったという意味ではない。
- ③知り合い(親戚)の家には、空いている客間がなかったということであろう。
- ④メシアは、人間が住む空間ではなく、家畜が住む空間で誕生された。
- ⑤町の外にある自然の洞窟が、家畜の囲い場になっていた。

結論：

1. この箇所へのヘブル的解釈

(1) 「布にくるんで」

- ①当時は、死者の埋葬はすぐに行われた(腐敗する前に)。
- ②墓は町の外にあった。
- ③墓に行く途中に洞窟があり、そこに埋葬のための亜麻布が貯蔵されていた。
- ④イエスはその亜麻布にくるまれた。

(2) ピリ 2 : 6~8

「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました」

- ①低き者は高くされ、高き者は低くされるという真理の始まりである。
- ②マリアの賛歌の中で歌われていた。

2. 世界史の中のイエス誕生

(1) ルカは、イエスの誕生を世界史の中に位置づけようとした。

- ①ユダヤ人の世界(特定の国)からローマ世界(普遍的世界)へ
- ②「クレニオがシリアの総督であった時に行われた最初の人口調査」
- ③しかし、クレニオがシリアの総督であった時期は、紀元6~7年である。
- ④これでは、イエスの誕生は紀元後になる。

(2) 「ローマ人の物語VI」(塩野七生)

「それは、紀元前と後の境界線上にあるこの時期に、イエス・キリストが生まれてい
たはずだからだ。ただし、ローマ皇帝アウグストゥスによる国勢調査のためにヨセフ
とマリアが本籍地にもどる旅の途中で生まれたという美しいエピソードだが、この前
後には国政調査は実施されていないのである。…いずれにしても、この私の素朴な疑
問に納得のいく答えをくれた研究者は、今のところ一人もいない」(p. 285~286)

(3) イエスは何年に誕生したのか。

- ①キリスト紀元は、525年に、ローマの僧ディオニシウス・エクシグウスによっ
て創案された宗教的紀年法である。
- ②しかし、エクシグウスの計算法には誤差があった。

(4) 4つのヒント

- ①ヘロデ大王が死んだ年は前4年
*イエスは前4年以前に誕生している。
- ②ルカ2章の「クレニオがシリアの総督であったとき」という記述
*クレニオは、2度シリアの総督を務めた。
*前10~7年、クレニオはシリアの軍事担当総督であった(W・M・ラムゼー)。
*この住民登録は、前8年に行なわれたものである。
*パレスチナでの実施は、時期が多少遅れたと思われる。
- ③ヨセフと、マタイの福音書の記録から導き出される情報
*ヘロデ大王は、前5年にエリコに移り、そこで死ぬ。
*天文学者たちのエルサレム訪問は、前5年以前に起こっているという。
- ④マタイの福音書の記録から導き出される情報
*天文学者たちがやってきた時、イエスはすでに2歳ぐらいになっていた。
*イエスの誕生は前5年よりもさらに2年弱遡ることになる。
- ⑤以上のことから、イエスの誕生は前7年~6年のどこかで起こったことになる。
ただし、誕生の月日までは分からない。

- ⑥12月25日がイエス誕生の日として制度化されたのは、紀元325年のニカイア公会議以降のことである。ミトラス教の祝日(不滅の太陽の生誕日)である12月25日が、救い主誕生の日として解釈された。

3. 聖書の歴史観

(1) 歴史を観察する3つのレベル

- ①表層的観察(個々の現象には反応しても、それらの関連性は見えていない)
②底流の観察(大原則に基づいて個々の現象を位置づける)
*西洋を軸に歴史を見るか、東洋を軸に歴史を見るか。
*これは、大きな問題である。
③イスラエルを軸にした観察(異次元の歴史観)

(2) 神は、この世の支配者をご自分の目的のために用いる。

- ①ネブカデネザル(バビロンの王)
*背信の民イスラエルを裁くための神の器である。
*しかし、ネブカデネザルもまた、イスラエルを苦しめた罪で裁かれる。
②クロス(ペルシヤの王)
*勅令を出して、イスラエルの民の約束の地への帰還を許可した。
③皇帝アウグスト
*ミカ5:2の成就のために、用いられた。
④ヒトラー
*600万人のユダヤ人が殺された。
*しかし、イスラエルという国が誕生した。
⑤イランやアラブ諸国
*ユダヤ人を神に向かわせる力となっている。
⑥反キリスト
*大患難時代になると、反キリストはユダヤ人を抹殺しようとする。
*しかし、最後にユダヤ人は民族的救いを体験するようになる。

(3) 聖書の歴史観を前提に、限られた人生を燃焼させようではないか。

「羊飼いたちへの告知」 ルカ2:8~20

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ヨハネとイエスの対比(特にルカの福音書)
- ②マリアへの告知
- ③マリアのエリサベツ訪問とマリアの賛歌
- ④ヨセフへの告知
- ⑤皇帝アウグストによる人口調査の勅令
- ⑥ベツレヘム滞在中の出産

(2) きょうの箇所

- ①クリスマス物語で最もよく知られているところ
- ②羊飼いたちへの告知

2. アウトライン

- (1) 羊飼いたちへの告知(8~12節)
- (2) 天使たちの賛美(13~14節)
- (3) 幼子の礼拝(15~20節)

3. メッセージのゴール

- (1) 羊飼いが主役であることの意味
- (2) 「きょう」という言葉の意味
- (3) イエスの3つのタイトル

このメッセージは、羊飼いたちへの告知の意味について学ぼうとするものである。

I. 羊飼いたちへの告知(8~12節)

1. 8節

「さて、この土地に、羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた」

- (1) 「この土地」とは、ベツレヘム近郊のこと。

①ダビデの例(1サム17:34~35)

「ダビデはサウルに言った。『しもべは、父のために羊の群れを飼っています。獅子や、熊が来て、群れの羊を取って行くと、私はそのあとを追って出て、それを

殺し、その口から羊を救い出します。それが私に襲いかかるときは、そのひげをつかんで打ち殺しています』

- ②温暖な気候である。
- ③12月でないとは言い切れない。

(2) ベツレヘム近郊の羊飼いたち

- ①神殿で捧げる小羊を飼っていた。
- ②特に、過越の祭りで捧げる小羊であるという学者もいる。
- ③この物語の羊飼いたちがそれなのかどうかは、断言できない。
- ④イエスが誕生した洞窟は、これらの羊飼いたちの所有物である可能性もある。

2. これまでの2つの告知に似たパターンがある(1:13~20と28~37)。

(1) 天使の出現(9節a)

「すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、」

- ①ここでは天使の名は出ていない。ガブリエルかもしれない。
- ②主の栄光は「シャカイナグローリー」である。
- ③メシア誕生に伴うシャカイナグローリーである。
- ④預言者エゼキエルの時代に、シャカイナグローリーは神殿から去った。
- ⑤ヘロデが拡張した神殿には、シャカイナグローリーはなかった。
- ⑥約500年ぶりにシャカイナグローリーがイスラエルの民の間に戻ってきた。
- ⑦メシア時代の到来である。

(2) 恐れへの反応(9節b)

「彼らはひどく恐れた」

- ①直訳は、「大いなる恐れを恐れた」となる。
- ②文語訳は、「甚(いた)く懼(おそ)る」となっている。
- ③ザカリヤの例(1:13)とマリアの例(1:30)

(3) 励ましの言葉(10節)

「御使いは彼らに言った。『恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです』」

- ①「恐れることはない」。ザカリヤもマリアも、同じ言葉を受けている。
- ②その理由は、喜びの知らせを持って来たということ。
- ③「この民全体」とは誰のことか。

* 「民」とはギリシア語でラオスである。

- *ルカは全人類の救いという構想を持っていた(使徒行伝で明らかになる)。
- *しかし、ここでは「この民」とはイスラエル人のことである。
- *イエスは、第一義的にはユダヤ人のメシアとして来られた。

(4) 神からのメッセージ (11 節)

「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです」

① 「きょう」

- *メシアによる救いの始まり

② 「ダビデの町」

- *ベツレヘム
- *ダビデ契約の成就

③ 3つのタイトル

- *救い主
- *キリスト
- *主

(5) しるしの付与 (12 節)

「あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つめます。これが、あなたがたのためのしるしです」

- ① 布にくるまっている。
- ② 飼葉おけに寝ている。
- ③ これは極めて稀な状態なので、「しるし」となり得る。
- ④ 羊飼いたちは、周辺にある洞窟をよく知っていた。

II. 天使たちの賛美 (13～14 節)

1. 13 節

「すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現れて、神を賛美して言った」

- (1) 「多くの天の軍勢」が参加した。
 - ① 「軍勢」(スツラティア) は、軍事用語である。
 - ② その彼らが、平和を宣言するのである。

(2) 賛美は、被造物に最も自然な行為である。

①天使たちもまた、被造物である。

2. 14節

「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」

(1) これはヘブルの対句法である。

①いと高き所 - 地の上

②栄光 - 平和

③神にあるように - 御心にかなう人々にあるように

(2) 「いと高き所」とは、第3の天(神の臨在の場)である。

(3) 「御心にかなう人々」とは、神に信頼を置く人々である。

III. 幼子の礼拝(15~20節)

1. 15節

「御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。『さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう』」

(1) 彼らは、天使の御告げを神のことばと理解した。

①「ダビデの町」をベツレヘムと理解した。

(2) ただちに行動を起こしている。

①マリアがエリサベツを訪問したのと同じ姿勢

②エルサレムにいた宗教的指導者たちとは対照的(マタ2:5)

2. 16~18節

「そして急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた」

(1) 「探し当てた」

①発見の前に、捜す行為があった。

②「しるし」を知っていたので、発見できた。

(2) 羊飼いたちは、マリアとヨセフ以外の人々にも、自分たちの聞いたことを伝えた。

①それを聞いた人たちは、驚いた。

3. 19～20 節

「しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことが、全部御使いの話のとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った」

(1) この時点でのマリアの理解度はまだ不十分であった。

①天使の告知、エリサベツの出産、羊飼いの言葉などの意味を考えた。

②出来事を比較し、その重要性を推し量る。

③彼女はこれを継続して行っていた。

④メシアの母の大いなる期待と不安がここに見られる。

(2) 羊飼いたちは、天に帰った天使たちの賛美を引き継いで神を賛美した。

①羊の群れのところに帰って行った。

結論：

1. 羊飼いが主役であることの意味

(1) メシア誕生の知らせは、先ず貧しい者たちにもたらされた。

①羊飼いの実態（童話的なイメージではない）

②律法に無知、嘘つき、罪人、汚れている者

③取税人や遊女と同じように、社会的のけ者である。

(2) 逆転の真理がある。

①マリア自身が体験したこと

②マリアの賛歌に歌われている（1：51～55）。

「主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもペイスラエルをお助けになりました。私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです」

2. 「きょう」という言葉の意味（11 節）

「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです」

(1) メシアによる救いの時の始まり

①歴史の分水嶺

(2) ルカの福音書の中での「きょう」という言葉の使用例

①4:21 ナザレの会堂にて

「イエスは人々にこう言って話し始められた。『きょう、聖書のこのみことばが、あなたがたが聞いたとおりに実現しました』」

②5:26 中風の人癒し

「人々はみな、ひどく驚き、神をあがめ、恐れに満たされて、『私たちは、きょう、驚くべきことを見た』と言った」

③19:5 エリコにて

「イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。『ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから』」

④19:9 ザアカイの家にて

「イエスは、彼に言われた。『きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから』」

⑤22:61 イエスを否んだペテロ

「主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、『きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う』と言われた主のおことばを思い出した」

⑥23:43 十字架上にて

「イエスは、彼に言われた。『まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます』」

3. イエスの3つのタイトル (11節)

「きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです」

(1) 救い主 (ソテイア)

①ローマ帝国では、皇帝を「救い主」と呼ぶようになった。

②クリスチャンにとっては、それはキリストのことである。

③自分は罪人だという認識があつて初めて、この方は「救い主」となる。

(2) キリスト (クリストス)

①「油注がれた者」というタイトルである。

- ②ヘブル語では「メシア」である。
- ③このタイトルは、信者にとって最も重要なものとなる。
- ④救い主は、イエス・キリストと呼ばれるようになる。
- ⑤信者は、クリスチャンと呼ばれるようになる(使11:26)。
- ⑥私たちは、キリストにあって救いを得ている。

(3) 主(キュリオス)

- ①旧約聖書のヤハウエである。

(4) 最初にこの啓示を受けた人たちは、その意味を十分に理解していなかった。

- ①羊飼いがそうである。
- ②マリアもまた同様である。

*時として彼女の信仰は、揺らいだ(ルカ8:19。母と兄弟たち)。

- ③はっきりするのは、復活後である。

「ですから、イスラエルのすべての人々は、このことをはっきりと知らなければなりません。すなわち、神が、今や主ともキリストともされたこのイエスを、あなたがたは十字架につけたのです」(使2:38)

(5) ピリ3:20

「けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます」

- ①「主イエス・キリスト」
- ②英語で、「Lord Jesus Christ」である。
- ③救い主であるイエスは、メシアでありヤハウエである。
- ④この方によって、私たちの国籍は天に登録されている。

「誕生後の40日間」 ルカ 2：21～38

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ヨハネとイエスの対比（特にルカの福音書）
- ②皇帝アウグストによる人口調査の勅令
- ③ベツレヘム滞在中の出産
- ④羊飼いたちへの告知

(2) きょうの箇所

- ①誕生後の40日間の出来事
- ②A. T. ロバートソンの著書では、§12がイエスの割礼、§13が神殿での奉献。

2. アウトライン

- (1) イエスの割礼（21節）
- (2) エルサレム上り（22～24節）
- (3) 預言者シメオン（25～35節）
- (4) 女預言者アンナ（36～38節）

3. メッセージのゴール

- (1) 福音のユダヤ性
- (2) 福音の普遍性
- (3) 真の信仰者たち

このメッセージは、イエスの働きの意味について学ぼうとするものである。

I. イエスの割礼（21節）

1. 21節

「八日が満ちて幼子に割礼を施す日となり、幼子はイエスという名で呼ばれることになった。胎内に宿る前に御使いがつけた名である」

(1) バプテスマのヨハネとの対比

- ①8日目の割礼
- ②命名
- ③すでに天使によって告げられていた名

(2) ここでは、割礼よりも命名に中心がある。

- ①ルカ1:31でマリアに告知
- ②マタ1:21でヨセフに告知
- ③イエスはヘブル語でヨシュア。「主は救い」という意味。
- ④幼子の働きの内容を描写した名前である。

II. エルサレム上り (22~24節)

1. 誕生後の40日間の流れ (レビ12:2~4)

(1) 男の子を産んだ場合は、7日間汚れる。

- ①祭儀的な汚れである。

(2) 8日目に割礼を施す。

- ①新生児が最も免疫力がある時

(3) 33日間家に留まる。

- ①「出血の汚れが清まるのに必要な33日の間」
- ②「聖なる物に触れたり、聖所にもうでたりしてはならない」
- ③実際は、出産した婦人への恵みの期間となる。

(4) 40日が満ちたとき (レビ12:6~8)

「彼女のきよめの期間が満ちたなら、それが息子の場合であっても、娘の場合であっても、その女は全焼のいけにえとして一歳の子羊を一頭と、罪のためのいけにえとして家鳩のひなか、山鳩を一羽、会見の天幕の入口にいる祭司のところに持って来なければならない。祭司はこれを【主】の前にささげ、彼女のために贖いをしなさい。彼女はその出血からきよめられる。これが男の子でも、女の子でも、子を産む女についてのおしえである。しかし、もし彼女が羊を買う余裕がなければ、二羽の山鳩か、二羽の家鳩のひなを取り、一羽は全焼のいけにえとし、もう一羽は罪のためのいけにえとしなさい。祭司は彼女のために贖いをする。彼女はきよめられる」

①いけにえを捧げることが命じられている。

*全焼のいけにえ(燔祭、焼き尽くす捧げ物)は、1歳の小羊1頭。

・ギリシア語で「ホロコースト」である。

*罪のためのいけにえ(罪祭、贖罪の捧げ物)は、家鳩のひなか、山鳩1羽。

②例外規定

*2羽の山鳩か、2羽の家鳩のひな

*全焼のいけにえと、罪のためのいけにえとする。

2. 22～24節

「さて、モーセの律法による彼らのきよめの期間が満ちたとき、両親は幼子を主にささげるために、エルサレムへ連れて行った。——それは、主の律法に『母の胎を開く男子の初子は、すべて、主に聖別された者、と呼ばれなければならない』と書いてあるとおりであった——また、主の律法に「山ばと一つがい、または、家ばとのひな二羽」と定められたところに従って犠牲をささげるためであった」

(1) 2つのテーマが交差対句法で展開されている(キアスモス、キアズム)。

- ①A マリアの清め(22節a)
- ②B イエスを捧げること(22節b)
- ③b イエスを捧げること(23節)
- ④a マリアの清め(24節)

(2) マリアの清め

- ①レビ記12章の規定に基づく
- ②「彼らのきよめの期間」とあるのは、夫婦一体であることを示している。
- ③場所は、婦人の庭からイスラエルの庭に入るためのニカノルの門(15段ある)。
- ④マリアは、貧者のための例外規定を採用した。

*東方の博士たちは、まだベツレヘムに到着していなかったことが分かる。

(3) イエスを捧げること

①出13:2

「イスラエル人の間で、最初に生まれる初子はすべて、人であれ家畜であれ、わたしのために聖別せよ。それはわたしのものである」

②出13:15(父から子への言葉)

「パロが私たちを、なかなか行かせなかったとき、【主】はエジプトの地の初子を、人の初子をはじめ家畜の初子に至るまで、みな殺された。それで、私は初めに生まれる雄をみな、いけにえとして、【主】にささげ、私の子どもたちの初子をみな、私は贖うのだ」

③贖いの代価は、銀5シケルである(民18:15～16)。

④ところが、両親は贖い金を支払ったとは書かれていない。

⑤旧約聖書の例:サムエルの母ハンナ(1サム1:27～28)

『この子のために、私は祈ったのです。【主】は私がお願いしたとおり、私の願

いをかなえてくださいました。それで私もまた、この子を【主】にお渡しいたします。この子は一生涯、【主】に渡されたものです。』こうして彼らはそこで【主】を礼拝した」

⑥両親はイエスを神に捧げた。

Ⅲ. 預言者シメオン (25～35 節)

1. シメオンの登場

(1) 25 節

「そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルの慰められることを待ち望んでいた。聖霊が彼の上にとどまっておられた」

① 2 人の証人

*シメオンは預言者

*アンナ(ハンナ)は女預言者

②ヨハネの場合は、割礼と命名の後、ザカリヤによる賛美と預言があった。

*イエスの場合も同じである。

*シメオンによる賛美と預言がある。

③シメオンが誰なのかは分からない。果たしている役割が重要である。

④彼は、旧約的な意味での義人である。信仰によって救われている。

⑤「イスラエルの慰められることを待ち望んでいた」

*メシアの到来による慰め

⑥「聖霊が彼の上にとどまっておられら」

*旧約的な意味での聖霊の支配

(2) 26 節

「また、主のキリストを見るまでは、決して死なないと、聖霊のお告げを受けていた」

①生きている間に、メシアが誕生するという啓示があった。

②「主のキリスト」とは、「ヤハウェによって油注がれたお方」という意味である。

(3) 27 節

「彼が御霊に感じて宮に入ると、幼子イエスを連れた両親が、その子のために律法の慣習を守るために、入って来た」

①聖霊の導きがあって、宮に入った。

②「神殿の境内」(新共同訳)

③聖所とは違う。

④ちょうどその時、イエスの両親がイエスを連れて入って来た。

* 目的は、「その子のために律法の慣習を守るため」である。

* マリアの清めも目的のひとつであるが、関心がイエスに向けられている。

2. シメオンの歌 (28～32 節)

「すると、シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。『主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです。御救いはあなたが万民の前に備えられたもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です』

(1) 直訳

「今こそ、あなたのしもべを去らせてくださいます、主よ。…」となる。

①「今こそ」に強調点がある。

②シメオンの歌を「ヌンク・ディミティス」と言う(ラテン語)。

③彼は歴史の目撃者となった。

(2)「私の目があなたの御救いを見たからです」

①イザ 52 : 10

②ヘブル語の言葉遊びがある。

* イェシュアとイェシュアー(救い)

(3)「私の目があなたの御救いを見たからです。御救いはあなたが万民の前に備えられたもので、異邦人を照らす啓示の光、御民イスラエルの光栄です」

①異邦人に救いをもたらす。

②イスラエルの民の光栄となる。

③イザ 42 : 6

3. シメオンの預言 (33～35 節)

「父と母は、幼子についていろいろ語られる事に驚いた。また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。『ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人の心の思いが現れるためです』」

(1) 両親の驚き

①天使の告知以上の内容である。

②初対面のシメオンがこれほどまでに幼子の将来を預言した。

(2) 預言の内容

- ①メシアは、イスラエルの民を二分する。
- ②高き者は低くされ、低き者は高くされる。
- ③「反対をうけるしるし」とは、ユダヤ人から拒否されるということ。
- ④現在形の受動態分詞。継続した動作。今もこの状態が続いている。
- ⑤メシアにどういう態度を取るかによって、人の心の思いは明らかになる。

IV. 女預言者アンナ

1. アンナの登場 (36～37 節)

「また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、その後やもめになり、八十四歳になっていた。そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた」

(1) 84歳の女預言者

- ①アセル族のパヌエルの娘
- ②どうしてアセル族という部族名が出て来たのかは、分からない。
- ③権威づけのためか。

(2) 「夜も昼も」

- ①ヘブル的表現
- ②いつも、という意味

2. アンナの預言 (38 節)

「ちょうどこのとき、彼女もそこにおいて、神に感謝をささげ、そして、エルサレムの贖いを待ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った」

(1) 彼女の預言は、省略されている。

- ①シメオンと同じような預言があったと思われる。

(2) 彼女は、イエスのことを言い広めた。

- ①イエスはこの段階から、有名になった。

結論：

1. 福音のユダヤ性

(例話) 昼から一挙に夜になるのではない。カイザリヤで見る日没。

旧約時代から新約時代への移行

(1) ルカの福音書の中の4つの詩篇

- ① エリサベツの歌 (1:42~45)
- ② マリアの賛歌 (1:46~55)
- ③ ザカリヤの歌 (1:68~79)
- ④ シメオンの歌 (2:28~32)

* 詩篇の形式を保持しつつ、内容は極めて新約的である。

(2) メシアは割礼を受けたユダヤであった。

- ① メシアは100%、モーセの律法に従われた。
- ② ガラ4:4~5

「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれ、また律法の下にある者となさいました。これは律法の下にある者を贖い出すため、その結果、私たちが子としての身分を受けようになるためです」

* 神の子は人となられた。

* 神の子はユダヤ人となられた。

* 「律法の下にある者」(ユダヤ人)を贖い出すため。

* ユダヤ人も異邦人も、子としての身分を受けようになるため。

(3) マリアとヨセフは、モーセの律法に従っていた。

2. 福音の普遍性

(1) シメオンの預言の中にあるメシア預言の引用

① イザ42:6

「わたし、【主】は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする」

* 「民の契約」とは、民と契約を結ぶ仲介者の意味。

* 「国々の光」とは、異邦人のためのメシアという意味。

② イザ49:6

「主は仰せられる。『ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする』

*イスラエルを救うだけではない。

*異邦人の救い、福音の普遍性がこの段階で認識されている。

(2) 福音は、ローカルなものから、徐々にユニバーサルなものに移行していく。

①本来のキリスト教は、西洋的なものではない。

3. 真の信仰者たち

(1) 神はイスラエルの残れる者(レムナント)を通して働いておられる。

①シメオンは、「イスラエルの慰められることを待ち望んでいた」(25節)

*メシア的希望である。

②アンナは、「エルサレムの贖いを待ち望んでいる人」(38節)

*メシアによる救いの希望である。

*彼女は、同じ信仰を持つ人たちに幼子のことを語った。

③アリマタヤのヨセフ(ルカ23:51)

「この人は議員たちの計画や行動には同意しなかった。彼は、アリマタヤ

という

ユダヤ人の町の人で、神の国を待ち望んでいた」

*メシア的王国を待ち望んでいた。

④パウロの証言(使24:15)

「また、義人も悪人も必ず復活するという、この人たち自身も抱いている

望みを、

神にあって抱いております」

*終末的希望である。

*義人は、永遠の命に復活する。

*悪人は、永遠の滅びに復活する。

(2) 真の信仰者に共通するのは、神の計画の成就への希望である。

2012年6月3日（日）、4日（月） メシアの生涯 13回目 IV-012、013
誕生後の40日間

- ① 携挙
- ② 再臨
- ③ 復活（栄化、体のよみがえり）

「東方の博士たちの訪問」 マタ2:1~12

1. はじめに

(1) 文脈の確認

皇帝アウグストによる人口調査の勅令
ベツレヘム滞在中の出産
羊飼いたちへの告知
エルサレム上り(誕生後の40日間の出来事)

(2) きょうの箇所

東方の博士たちの訪問(イエスの誕生が公けに影響を持ち始める)

2. アウトライン

- (1) 博士たちのエルサレム訪問(1~2節)
- (2) ヘロデ王の応答(3~8節)
- (3) 博士たちによる幼子の礼拝(9~12節)

3. メッセージのゴール

- (1) ヘロデ王とイエスの対比
- (2) 宗教的指導者たちと博士たちの対比

このメッセージは、イエスがもたらす2分について学ぼうとするものである。

. 博士たちの訪問(1~2節)

1. 1節

「イエスが、ヘロデ王の時代に、ユダヤのベツレヘムでお生まれになったとき、見よ、東方の博士たちがエルサレムにやって来て、こう言った」

(1) ヘロデ王の時代

ヘロデは、ユダヤ人とイドマヤ人の混血である。
彼はユダヤ教に改宗した。定義的にはユダヤ人である。
前37年にローマの認定を受けてユダヤの王となった。
*クリエンテストとパトロヌスの関係(相互扶助関係)

(2) ユダヤのベツレヘム

「パンの家」という意味。農業生産の豊かな地。ダビデの町とも呼ばれた。
ガリラヤのベツレヘムと区別するために、ユダヤのベツレヘムと書かれている。
1880年代、200軒の家、クリスチャンとイスラム教徒が平和に住んでいる。
今日、パレスチナ自治区。2万2千人。クリスチャンは迫害に会っている。

(3) 東方の博士たち

マゴス(複数形はマゴイ)、マジシャンの語源。

天文学者、占星術師、医師、祭司、賢人(ペルシヤ、アラビアなど)

ダニ 2 : 49

「そこで王は、ダニエルを高い位につけ、彼に多くのすばらしい贈り物を与えて、
彼にバビロン全州を治めさせ、また、バビロンのすべての知者たちをつかさどる
長官とした」

紀元6世紀に3人の名前が確定

* ギヤスパー、メルキオール、バルタザル

(4) エルサレム

ユダヤの首都

ヘロデによる神殿の拡張

ヘロデの王宮があった町

2.2 節

「ユダヤ人の王としてお生まれになった方はどこにおいでになりますか。私たちは、東の
ほうでその方の星を見たので、拝みにまいりました」

(1) 彼らを導いたのは、超自然的な星であった。

最初は東から西に、次は北(エルサレム)から南(ベツレヘム)に移動した。

最後は幼子イエスのおられた家の上にとどまった。

この星は、シャカイナグローリー(神の栄光の光)である。

(2) ダニ 9 : 24 ~ 27 の預言

70 週の預言と呼ばれる。

メシア到来のタイムテーブルを提供している。

当時、ユダヤ人の中にはメシア待望の雰囲気が高まっていた。

ペルシヤの賢人たちは、ダニエル書の預言を知っていた。

(3) 民 24 : 17 の預言

「私は見る。しかし今ではない。私は見つめる。しかし間近ではない。ヤコブから一つの星が上り、イスラエルから一本の杖が起こり、モアブのこめかみと、すべての騒ぎ立つ者の脳天を打ち砕く」

異教の預言者バラムの預言(彼はバビロンの占星術師である)
イスラエルを祝福する預言の中で、「ヤコブからひとつの星が上り」と言った。
この預言がユニークなのは、メシアの誕生と星を結び付けている点である。
彼らは、バラムの後継者たちである。

(4) エルサレムを目指して

彼らはミカ5:2の預言を知らなかった。
ユダヤ人の王として生まれるなら、当然エルサレムであろうと判断した。

・ヘロデ王の応答(3~8節)

1.3節

「それを聞いて、ヘロデ王は恐れ惑った。エルサレム中の人も王と同様であった」

(1) 訳文の比較

- 「それを聞いて、ヘロデ王は恐れ惑った」(新改訳)
- 「ヘロデ王はこのことを聞いて不安を感じた」(口語訳)
- 「これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた」(新共同訳)
- 「ヘロデ王これを聞いて悩みまどふ」(文語訳)

(2) 恐れの原因

「ユダヤ人の王」という言葉が問題である。
ヘロデの王としての正当性が否定された。
事実、彼はユダ族ではないので、イスラエル人の王となる資格はない。
星の登場は、不吉の前兆である。

(3) エルサレム中の人も同様であった。

特に、政治的、また宗教的指導者たち。
* そのほとんどがヘロデによってその地位を得ていた。
* 新しい王の到来によって、地位を追われる。
* イエスの最後の1週間の予表がある。
一般民衆

- *ヘロデの残酷さを体験していた。
- *老齢で病弱なヘロデは、何をしでかすか分からない。

2.4~6節

「そこで、王は、民の祭司長たち、学者たちをみな集めて、キリストはどこで生まれるのかと問いただした。彼らは王に言った。『ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。』
「ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから。」」

(1) ヘロデは真のユダヤ教徒ではない。

- メシアの誕生を喜んでいない。
- ミカ書の預言を知らない。

(2) 祭司長たちと学者たち

- 祭司長たちは、24の祭司の組の長たちである。
- 学者たちは、本来は書記(公の記録や聖書の写本を書いたりする)である。
 - *彼らは、律法学者とも呼ばれる。
 - *主にパリサイ派であるが、サドカイ派にもいた。
- これは、サンヘドリンのことであろう。
 - *72人の議員からなるユダヤの最高議会
 - *ユダヤ人の市民生活と宗教生活を統治した。
- 回答はミカ書5章2節にあった。

(3) 引用内容の検討

「ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。」(ミカ5:2、新改訳)

「ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。」(マタ2:6、新共同訳)

- 「決して」という言葉が入っている。
 - *預言が成就し、ベツレヘムが大いなる町となった。
- 「わたしの民イスラエルの牧者となる」という言葉が入っている。
 - *エゼ34章の良き牧者(【主】の僕ダビデ)の預言の成就省略されている言葉がある。

「イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである」

通常の引用法は、ギリシア語の旧約聖書(七十人訳)からである。

マタイは、自分で意識して引用している。オリジナルに解釈を加えたもの。

ユダヤ人は、オリジナルを知っていたので、マタイの意図を理解した。

3.7~8節

「そこで、ヘロデはひそかに博士たちを呼んで、彼らから星の出現の時間を突き止めた。そして、こう言って彼らをベツレヘムに送った。『行って幼子のことを詳しく調べ、わかったら知らせてもらいたい。私も行って拝むから』」

(1) 自らの意図を隠すために、ひそかに博士たちを呼んだ。

星の出現の時間を突き止めた。

幼子の誕生の時期を確かめ、何歳くらいになっているかを推測するため。

(2) ヘロデは嘘をついている。

彼は、幼子を抹殺しようとしている。

もし神の介入がなかったなら、そうになっていたであろう。

・博士たちによる幼子の礼拝(9~12節)

1.9~10節

「彼らは王の言ったことを聞いて出かけた。すると、見よ、東方で見た星が彼らを先導し、ついに幼子のおられる所まで進んで行き、その上にとどまった。その星を見て、彼らはこの上もなく喜んだ」

(1) シャカイナグローリーが彼らを導いた。

町にではなく、家に導いた。

(2) 星が再び現れたので、彼らは非常に喜んだ。

神の御心のうちを歩んでいるという保証が与えられた。

2.11節

「そしてその家に入って、母マリヤとともにおられる幼子を見、ひれ伏して拝んだ。そして、宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた」

(1) ヨセフの一家は、家に移り住んでいた(時間の経過が感じられる)。

(2) これが、異邦人による最初のメシア礼拝である。

ユダヤ人による最初のメシア礼拝は、羊飼いたちが行った。
敬意を表するために贈り物を捧げるのは、東方の習慣である。
* これは、ユダヤ人の習慣でもある。

(3) 3つの贈り物

旧約聖書の伝統

- * 黄金は王としての身分を
- * 乳香は神性を
- * 没薬は死を象徴するものである。

イエスは神であり、王であり、そして贖いの死を遂げるメシアである。
この贈り物は、エジプトに逃れるための資金となった。

3. 12 節

「それから、夢でヘロデのところへ戻るなという戒めを受けたので、別の道から自分の国へ帰って行った」

- (1) 博士たちは、エルサレムに戻ることなく、別の道を通して国に帰って行った。
メシアを守る神の御手
真実な信仰を持つ者には、神の守りと導きとが与えられる。
悪人の意図は、破壊される。

結論：

1. ヘロデとイエスの対比

(1) ヘロデ

ヘロデ大王 (Herod The Great) と呼ばれる。

- * 建築家
 - * 政治家、外交官
- 大いなる罪人
- * 重税と労役を民に課した。
 - * 年を取るに従って偏執狂になって行った。
 - * 愛妻マリアンメの2人の息子を殺害(アリストビュラスとアレキサンデル)
 - * マリアンメも殺した。
 - * 別の妻による息子アンティパテルも殺した。
 - * マリアンメの兄弟と母親を殺した(アリストビュラスとアレキサンドラ)

* マリアンメの祖父ジョン・ヒルカノスも殺した。

皇帝アウグストの言葉

「ヘロデの息子(ヒュイオス)になるよりは、ヘロデの豚(ヒュス)になった方がまだましだ」

(2) イエス

「ユダヤ人の王」という言葉が再び登場するのは、十字架の場面である。

ヘロデは33歳で王となったが、イエスはその年齢で十字架に付いた。

イエスの生涯は、羊飼いととしてのそれであった。

マコ6:34

「イエスは、舟から上がられると、多くの群衆をご覧になった。そして彼らが羊飼いのいない羊のようであるのを深くあわれみ、いろいろと教え始められた」

ゴルゴタにおいて、神の弱さが現れ出た。

イエスは、自己犠牲によって王としての務めを全うした。

1コリ1:21~25

「事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことは愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。ユダヤ人はしるしを要求し、ギリシヤ人は知恵を追求します。しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かですが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。なぜなら、神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです」

2. 宗教的指導者たちと博士たちの対比

(1) メシア誕生の地を知りながら、行動に移そうとしない人々

宗教家や、宗教熱心な人が陥りやすい欠点である。

(2) 東方の博士たち

大いなる犠牲を払って、メシアを礼拝した。

* 時間の犠牲、危険を冒した、財産を消費した。

* 彼らは、そのような犠牲を惜しまなかった。

イエスというお方の価値を認めていた。

「聖書研究から日本の霊的覚醒(目覚め)が」

* イエス・キリストの再発見

*** 福音の再発見**

「エジプトからナザレへ」 マタ2:13~23

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① 皇帝アウグストによる人口調査の勅令
- ② ベツレヘム滞在中の出産
- ③ 羊飼いたちへの告知
- ④ エルサレム上り(誕生後の40日間の出来事)
- ⑤ 東方の博士たちの訪問(イエスの誕生が公けに影響を持ち始める)

(2) 今日の箇所は3つの物語に分れる。

- ① ベツレヘムの幼子の虐殺
- ② ベツレヘムからエジプトへ
- ③ エジプトからナザレへ

* 共通した要素

* 最後に「〇〇と言われた事が成就するためであった」となる。

(3) マタ1~2章には、このパターンが5つ出て来る。

① マタ1:22~23 (イザ7:14)

「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。『見よ、処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる』(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である)

② マタ2:5~6 (ミカ5:2)

「彼らは王に言った。『ユダヤのベツレヘムです。預言者によってこう書かれているからです。「ユダの地、ベツレヘム。あなたはユダを治める者たちの中で、決して一番小さくはない。わたしの民イスラエルを治める支配者が、あなたから出るのだから』」

(4) 以上2つの例は、最も分かりやすい。

- ① メシア預言の直接引用とその成就
- ② きょう取り上げる③~⑤のパターンは、現代人には難解である。
- ③ 解釈学の原則
 - * 字義通り
 - * 意味はひとつ

- ④きょう取り上げる③～⑤のパターンは、ユダヤ的に解釈する必要がある。
- ⑤イエス時代のユダヤ教のラビたちの旧約聖書引用法
 - *直接引用とその成就
 - *その箇所解釈ではなく、適用である。
 - *きょうの③～⑤のパターンは、すべて適用である。
- ⑥マタイは、5つの引用によってイエスのメシア性を証明しようとした。

2. アウトライン

- (1) ベツレヘムの幼子の虐殺 (13～15 節)
- (2) ベツレヘムからエジプトへ (16～18 節)
- (3) エジプトからナザレへ (19～23 節)

3. メッセージのゴール (3つの対比)

- (1) ヘロデ王とサタン
- (2) イエスとモーセ
- (3) イエスと私たち信者

このメッセージは、イエスがメシア預言を成就する方であることを学ぼうとするものである。

I. ベツレヘムの幼子の虐殺 (13～15 節)

1. 13～15 節 a

「彼らが帰って行ったとき、見よ、主の使いが夢でヨセフに現れて言った。『立って、幼子とその母を連れ、エジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を捜し出して殺そうとしています』。そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、ヘロデが死ぬまでそこにいた」

- (1) 東方の博士たちが帰って行ったとき
 - ①事態は刻々変化している。
 - ②再び天使が夢でヨセフに現れた。
- (2) 「幼子とその母を連れ」
 - ①「あなたの息子」とは言わない。ヨセフは義父である。
 - ②語順は、イエス、マリアである。イエスがこの物語の中心にいる。
- (3) 「エジプトに逃げなさい」

- ①ベツレヘムからエジプトまでは、100キロメートルを超える距離。
- ②当時エジプトは、ローマの属州であった。ヘロデは手が出せない。
- ③旧約時代から、エジプトは逃れの地であった。
- ④紀元1世紀の頃、エジプトには100万人ほどのユダヤ人共同体があった。
- ⑤彼らは数世紀にわたってエジプトに住み、神殿やシナゴグを所有していた。
- ⑥ヨセフの一家は、同胞の間に住むことができた。
- ⑦メシアが約束の地を離れたのは、この時だけである。
- ⑧かつて、イスラエルの民を奴隷にした国が、メシアに逃れの場を提供した。

(4) 「そこで、ヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、ヘロデが死ぬまでそこにいた」

- ①ヨセフはすぐに行動を起こした。従順な態度。
- ②密かにベツレヘムを脱出した。

2. 15節b

「これは、主が預言者を通して、『わたしはエジプトから、わたしの子を呼び出した』と言われた事が成就するためであった」

- (1) マタ2:15は、ホセ11:1を引用している。
 - ①ホセ11:1は、預言ですらない。
 - ②出エジプトの出来事によって表現されたイスラエルへの神の愛を示している。
- (2) マタイは歴史的イベントを取り上げ、それを「型(タイプ)」として説明している。
 - ①「型(タイプ)」があるなら、「本体(オリジナル)」もある。
 - ②出エジプトとは、イスラエルの民(神の子)がエジプトから救出された事件。
 - ③「本体(オリジナル)」は、御子イエスの救出である。
 - ④「エジプト」とは「ヘロデの脅威」のこと。

II. ベツレヘムからエジプトへ(16~18節)

1. 16節

「その後、ヘロデは、博士たちにだまされたことがわかると、非常におこって、人をやって、ベツレヘムとその近辺の二歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。その年齢は博士たちから突き止めておいた時間から割り出したのである」

- (1) ヘロデは騙されたと感じた。

①博士たちは、神のことばに従っただけ。

(2) 怒りの力

①必要以上の悪を働いている。

②2歳以下の男の子を殺した。

③ベツレヘムとその近辺は、小さな村落である。

④殺された人数は、20人前後であろう。

2. 17～18節

「そのとき、預言者エレミヤを通して言われた事が成就した。『ラマで声がする。泣き、そして嘆き叫ぶ声。ラケルがその子らのために泣いている。ラケルは慰められることを拒んだ。子らがもういないからだ』」

(1) マタ2:18は、エレ31:15を引用している。

①エレ31:15もまた、預言ではない。

(2) 実際の歴史的事件を取り上げ、それを適用(類似点が一つあればOK)している。

①ユダヤ人の息子たちが、バビロンに連行されようとしている。

②ラマ(エルサレムの北)は、最初の集合地点。そこからバビロンに向かう。

③母親たちがラマで嘆いている。

④ラケルは、イスラエルの母の象徴。

*ヤコブ(イスラエル)の最愛の妻。

*ラマの近くに葬られた(現在のラケルの墓は違う)。

*ヨセフとベニヤミンは、ラケルの息子たち。

*彼らは、エジプトで死んだ者と見なされた。

⑤ベツレヘムの母親たちは、自分の息子を失い、嘆き悲しんでいる。

*相違点は多い。ラマとベツレヘム、捕囚と殺害。

*息子を失ったという意味では、同じ。

Ⅲ. エジプトからナザレへ(19～23節)

1. 19～23節a

「ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが、夢でエジプトにいるヨセフに現れて、言った。『立って、幼子とその母を連れて、イスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちを分けねらっていた人たちは死にました』。そこで、彼は立って、幼子とその母を連れて、

イスラエルの地に入った。しかし、アケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行くとどまることを恐れた。そして、夢で戒めを受けたので、ガリラヤ地方に立ちのいた。そして、ナザレという町に行き住んだ」

(1) ルカ 2 : 39 との比較

「さて、彼らは主の律法による定めをすべて果たしたので、ガリラヤの自分たちの町ナザレに帰った」

①ルカの説明は、実に簡潔である。

(2) 再度、天使が夢に現れる。

①ヘロデは死んだ。

②イスラエルの地に帰還せよ。

(3) ヘロデの死後の状態

①ヘロデ・ピリポは、テラコニテ地方の国主。

②ヘロデ・アンテパスは、ガリラヤの国主。

③アケラオは、ユダヤ、サマリヤ、イドマヤを支配。

*父に似た残忍な人物である(3千人を殺した)。

*紀元6年にローマに行き、王の称号を得ようとした。

*ユダヤ人たちからの直訴があり、彼は退けられた。

*これ以降、ユダヤはローマの属州となる。

*総督がローマからやって来て、統治する。

(4) ヨセフは、アケラオを恐れた。

①イスラエルに地に入ったが、ベツレヘムに住むことを恐れた。

②ヨセフは、ベツレヘムに永住するつもりだったと思われる。

③ヨセフが不安に思ったことは、的外れではなかった。

④再度夢で語りかけを受けた(天使という言葉が省略されている)。

⑤ガリラヤ地方なら、アンテパスの支配下にあり、まだ安全である。

⑥故郷のナザレに行き住んだ。

2. 23節b

「これは預言者たちを通して『この方はナザレ人と呼ばれる』と言われた事が成就するためであった」

(1) マタ 2 : 23 は、「預言者たち」の預言である。

① 「この方はナザレ人と呼ばれる」という預言は旧約聖書にはない。

(2) これは、メシア預言を要約した引用法である。

①預言者が複数形である。

②ナザレ人の意味が重要である。

「彼はナタナエルを見つけて言った。『私たちは、モーセが律法の中に書き、預言者たちも書いている方に会いました。ナザレの人で、ヨセフの子イエスです』。ナタナエルは彼に言った。『ナザレから何の良いものが出るだろう』。ピリポは言った。『来て、そして、見なさい』」 (ヨハ1:46~47)

③紀元1世紀のユダヤ人の認識。北は愚か、南は賢い。

「金持ちになりたければガリラヤへ、賢くなりたければエルサレムへ」

④イエスは、さげすまれた寒村ナザレで育った。

⑤その背後にあるのは、イザ52~53章のイメージ。

⑥エルサレム神殿崩壊(70年)以降、ユダヤ教の中心はガリラヤに。

結論：メッセージのゴール (3つの型)

1. ヘロデ王とサタン

(1) ベツレヘムの幼子の虐殺は、歴史家の記録に残っていない。

①ベツレヘムは辺境の地。

②20人くらいの幼子は、取るに足りない。

③ヘロデの残虐行為は想像を絶する。

④妹のサロメに遺言を残した。

*ユダヤ人の指導者たちを競技場に集めておき、自分が死んだら殺せ。

*ユダヤ人たちが、自分の死を喜ぶことのないように。

(2) ヘロデの性格と行動は、極めてサタンの的である。

①ともに侵入者である。

②ともにメシアに敵対している。

③ともに神の民を破壊しようとしている。

2. イエスとモーセ

(1) 両者の間には、相関関係がある。

①ともに、幼児期に死の危険に直面したが、神の介入によって助かった。

②ともに、神の民を救うために働いた。

*モーセは、イスラエルの民をエジプトから解放した。

*イエスがもたらすものは、霊的出エジプトである。

③律法に関して

*モーセは律法の仲介者となった。モーセの律法。

*イエスは、公生涯においてモーセの律法を解き明かされた。

・山上の垂訓

・新しいモーセ

*イエスは、メシアの律法を与えてくださった。

3. イエスと私たち信者

(1) イエスに従う者は、イエスが歩まれた道を歩む。

①苦難、拒否、最後は死。

②しかし、神の計画はさらにその先に進む。

③それは、復活と高揚である。

(2) ヘブ 12 : 2~3

「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです」

「少年イエスのエルサレム上り」 ルカ2:40~52

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ルカのイントロダクション
- ②ヨハネの前書き
- ③バプテスマのヨハネの誕生
- ④イエスの誕生

(2) 今日の箇所は3つの部分に分れる。

- ①ナザレでの子ども時代(AT ロバートソンの§17)
- ②12歳でのエルサレム訪問(§18)
- ③公生涯までの生活(§19)

(3) 注目すべき神学的テーマ

①人間論

- *原罪を宿さない人間の赤子の成長が記録されている。
- *人類の歴史上、初めてのことである。

②キリスト論

- *キリストは、神であることを放棄したことはない。
- *受肉とは、神としての特権を捨てて人となられた、ということ。
- *人間イエスがどのようにして自我に目覚めて行ったかが記録されている。

2. アウトライン

- (1) 12歳までのイエス(40節)
- (2) 12歳でのエルサレム訪問(41~50節)
- (3) 12歳以降のイエス(51~52節)

3. メッセージのゴール(3つの予表)

- (1) エルサレムの中心性
- (2) 教師としてのイエス
- (3) 敬虔な人生

このメッセージは、人間イエスの成長について学ぼうとするものである。

I. 12歳までのイエス (40節)

1. 40節

「幼子は成長し、強くなり、知恵に満ちていった。神の恵みがある上であつた」

(1) バプテスマのヨハネとの対比

ルカ 1 : 80

「さて、幼子は成長し、その霊は強くなり、イスラエルの民の前に公に出現する日まで荒野にいた」

- ①肉体的成長
- ②霊的成長

(2) イエスの場合

- ①肉体的成長
- ②霊的成長
- ③知恵に満ちて行った。

* 現在形、受動態、分詞

* 肉体的成長に正比例して、知恵が増していった。

* これが理想形であるが、必ずしもそうはなっていない。

* 原罪のない人間性が、どのように成長するか例証である。

* 肉体の成長に伴って、知的、道徳的、霊的成長を遂げる。

* 後にも先にも、これが唯一の完ぺきな成長の例である。

④神の恵みがある上であつた。

* 「恵み」とは「カリス」である。

* 受ける価値のない者が、一方的に神の祝福に与ること。

* ここでは、神の寵愛を受けていたという意味。

(3) ルカは一貫して、ヨハネとイエスを対比してきた。

- ①イエスはヨハネよりも偉大であるとのメッセージがある。
- ②当時の人々には、これは重要なメッセージであつた。

(4) 12歳までのイエスに関する記述は、これだけである。

- ①ルカの目的は、イエスの公生涯を記すことにある。
- ②私的生活にはスペースを割かない。
- ③イエスの知恵については、次の箇所解説している。

II. 12歳でのエルサレム訪問 (41~50節)

1. 41節

「さて、イエスの両親は、過越の祭りには毎年エルサレムに行った」

(1) 3つの巡礼祭 (成人男子がエルサレムに上って祝う祭り)

- ①過越の祭り
- ②七週の祭り (五旬節、ペンテコステ)
- ③仮庵の祭り

(2) 離散以降、ディアスポラのユダヤ人たちにはこれを実行するのが困難になった。

- ①年に一度、過越の祭りにはエルサレムに上る。
- ②あるいは、数年に一度、生涯に一度など、経済状況に応じて異なる。
- ③生涯、一度もエルサレムに上らないユダヤ人も多くいた。

(3) パレスチナのユダヤ人たち

- ①過越の祭りの優位性
- ②少なくとも、年に一回、過越の祭りの時にエルサレムに上るように努力した。
- ③ヨセフとマリアは、過越の祭りには毎年エルサレムに行った。敬虔なユダヤ人。
- ④マリアは必ずしも行く必要はなかったが、信仰の表現としてそれを実行した。
- ⑤紀元1世紀のユダヤ人社会では、婦人の参加は一般的な習慣になっていた。
- ⑥ちなみに、エルサレム以外で行う過越の祭りは、モーセの律法違反である。

2. 42~43a節

「イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習に従って都へ上り、祭りの期間を過ごしてから、帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた」

(1) 12歳という年齢

- ①ユダヤ人の少年が父の職業を学び始める年齢である。
- ②13歳になると、神の前で成人した男子と見なされるようになる。
「父親は、13歳までは息子に神について話す、バール・ミツバ以降は、神に息子について話す」
- ③バール・ミツバという成人式の習慣は、後代のものかもしれない。
- ④預言者サムエルとの対比

1サム2:26

「一方、少年サムエルはますます成長し、【主】にも、人にも愛された」

1サム3:10

「そのうちに【主】が来られ、そばに立って、これまでと同じように、『サムエル。サムエル』と呼ばれた。サムエルは、『お話しください。しもべは聞いております』と申し上げた」

*ヨセフスはこれを、サムエル12歳の時と解説している。

(2) 両親はイエスをエルサレムに連れて行った。

- ①これは初めてなのかどうか、分からない。
- ②12歳でのエルサレム訪問は、イエスの生涯で画期的な経験となった。

(3) 祭りの期間を過ぎてから、帰路についた。

- ①過越の祭りは1日の祭りである。
- ②それに続いて、7日間の種なしパンの祭りがある。
- ③この時代、合計8日間を「過越の祭り」、「種なしパンの祭り」などと呼んだ。
- ④ユダヤ教では、巡礼者は最低2日間エルサレムに留まるように命じられた。

(4) 42~43a節の主動詞は、「とどまった」である。

「少年イエスはエルサレムにとどまっておられた」(新改訳)

「少年イエスはエルサレムに居残っておられた」(口語訳)

「少年イエスはエルサレムに残っておられた」(新共同訳)

- ①両親への意図的反抗ではない。
- ②潜在意識の中にあつた神殿や礼拝への興味が、少年イエスを捉えた。

3. 43b~47節

「両親はそれに気づかなかつた。イエスが一行の中にいるものと思つて、一日の道のりを行った。それから、親族や知人の中を捜し回つたが、見つからなかつたので、イエスを捜しながら、エルサレムまで引き返した。そしてようやく三日の後に、イエスが宮で教師たちの真ん中にすわつて、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いていた人々はみな、イエスの知恵と答えに驚いていた」

(1) 当時の巡礼者たちは、安全のためにグループ(キャラバン)を作つて移動した。

- ①両親は、イエスがグループの中にいるものと思ひ込んでいた。
- ②自立するのは、12歳の少年にはよいことである。

(2) 3日間の動き

- ①1日目は、エリコまで行き、そこでイエスいないことを発見した。
- ②2日目は、エルサレムまで引き返した。

③3日目は、イエスを宮で発見した。

(3) イエスの状態

①教師たちの真ん中に座っていた。

*律法学者と書かないのは、その言葉には否定的なニュアンスがあるから。

②話を聞いたり、質問したりしていた。

*ユダヤ式教授法は、質問を多用する。

*教師が生徒に質問したり、生徒に質問させたりする。

③イエスの教授法も同じである。

マタ 22 : 43~45

「それでは、どうしてダビデは、御霊によって、彼を主と呼び、『主は私の主に言われた。「わたしがあなたの敵をあなたの足の下に従わせるまでは、わたしの右の座に着いていなさい。」』と言っているのですか。ダビデがキリストを主と呼んでいるのなら、どうして彼はダビデの子なのでしょう」

(4) 聞いていた人々の状態

①イエスの知恵と答えに驚いていた。

②40節の「知恵に満ちていった」が実証された。

4. 48節

「両親は彼を見て驚き、母は言った。『まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も、心配してあなたを捜し回っていたのです』」

(1) 驚きの理由は、イエスを本当の意味で理解していないから。

①聞いてはいた(天使、羊飼いたち、シメオン、東方の博士などの言葉)。

②しかし、本当のことは聞いていなかった。

③誕生以来、12年間の平凡な日常生活があった。

5. 49~50節

「するとイエスは両親に言われた。『どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか』。しかし両親には、イエスの話されたことばの意味がわからなかった」

(1) イエスの最初のセリフである。

(例話) 劇作家は、最初のセリフを推敲して書いている。

①メシアの公生涯の方向性を決するものである。

(2) 訳文の比較

「どうしてわたしをお捜しになったのですか。わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか」(新改訳)

「どうしてお捜しになったのですか。わたしが自分の父の家にいるはずのことを、ご存じなかったのですか」(口語訳)

「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」(新共同訳)

- ①これは、ほとんど地上の両親との断絶宣言に近い。
- ②少年イエスの心に育ったメシアとしての使命意識
- ③「父の家」は「父の仕事」とも訳せる(KJVはそう訳している)。
- ④12歳のイエスは、天の父からも職業訓練を受け始めていた。
- ⑤イエスが神を「父」と呼んだ時点から、新しい時代の幕開けとなった。

(3) 両親は、イエスのことばの意味を理解できなかった。

①マリアの自己吟味

ルカ2:19

「しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた」

ルカ2:51

「母はこれらのことをみな、心に留めておいた」

(4) 弟子たちも、見たり聞いたりしていたが、本当のところはそうではなかった。

- ①すべてのことが腑に落ちるのは、復活を目撃して以降である。
- ②ペンテコステ以降、聖霊が彼らを真理へと導いた。

III. 12歳以降のイエス(51~52節)

1. 51節

「それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。
母はこれらのことをみな、心に留めておいた」

(1) 父なる神への従順と、地上の両親への従順の両立。

- ①エルサレムのとどまったのは、反抗的な動機からではないことを説明する。
- ②両親への従順は、モーセの律法が要求する責務である。
- ③大工としての職業を身に付けた。

2. 52節

「イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人ともに愛された」

- (1) 両親やラビたちよりも律法を理解していた少年が、約18年間の時を過ごす。
 - ①肉体的成長に正比例して知恵を身に付けた。
 - ②神と人に愛された。理想的な成長過程が描かれている。
 - ③これ以外の情報は、何も書かれていない。
 - ④次に登場するのは、およそ30歳になってからである。

結論：これから発展していくテーマについて3つの予表がある。

1. エルサレムの中心性

- (1) 少年イエスがメシアとしての使命に目覚めたのは、エルサレムである。
- (2) メシアは、エルサレムで十字架に付く。
- (3) メシアは、エルサレムで復活する。
- (4) 今は、霊とまことによって神を礼拝する時である。
- (5) しかし、終末の出来事は、エルサレムを中心に起こる。
 - ①大患難時代
 - ②メシアの再臨
 - ③メシア的王国
- (6) エルサレムが国際紛争の中心になるのは、偶然ではない。

2. 教師としてのイエス

- (1) 教師たちの中に座って、教師たちを仰天させるイエス
- (2) マタ 11:28~30

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」

3. 敬虔な人生

- (1) 過越の祭りを守る両親
- (2) 律法を学ぶイエス
- (3) 両親への従順な生活
- (4) 信仰表現としての律法の実践

「バプテスマのヨハネの登場」 ルカ3:1~2、マコ1:2~6

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①バプテスマのヨハネの誕生
- ②イエスの誕生
- ③イエスの幼少期

(2) 今日の箇所は、それから約18年後のこと。

①ヨハネ登場の年代 (A. T. ロバートソンの §20)

*マコ1:1

○ルカ3:1~2

②ヨハネの人物像とそのメッセージ (§21)

○マコ1:2~6

*マタ3:1~6

*ルカ3:3~6

2. アウトライン

- (1) ヨハネ登場の年代 (ルカ3:1~2)
- (2) 預言の成就 (マコ1:2~5)
- (3) ヨハネの風貌 (マコ1:)

3. メッセージのゴール (実に多くの適用がある)

- (1) 福音の歴史性
- (2) バプテスマの意味
- (3) 忍耐の必要性

このメッセージは、福音の始まりについて学ぼうとするものである。

I. ヨハネ登場の年代 (ルカ3:1~2)

1. 1~2a 節

「皇帝テベリオの治世の第十五年、ポンテオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの国主、その兄弟ピリポがイツリヤとテラコニテ地方の国主、ルサニヤがアビレネの国主であり、アンナスとカヤパが大祭司であったころ、」

- (1) ルカは歴史家である。
 - ① 当時は、支配者の統治年によって年代を確定した。
 - ② これは、当時の歴史家たちの一般的な手法である。
 - ③ ルカは、6種類の情報を列挙している。

2. 6種類の情報

(1) 「皇帝テベリオの治世の第十五年」

- ① アウグストの次の皇帝
- ② A. D. 11年から2年間、アウグストと共同統治。
- ③ 恐らく、A. D. 26年であろう。
- ④ テベリオは悪名高い皇帝である。
- ⑤ 次に彼が選んだ皇帝はカリギュラで、さらに悪名高い。

(2) 「ポンテオ・ピラトがユダヤの総督」

- ① 彼は、5代目のユダヤ総督である(A. D. 26~36年)。
- ② 1961年、カイザリヤで彼の名を刻んだ記念碑が発見された。

(3) 「ヘロデがガリラヤの国主」

- ① ヘロデ大王の息子、ヘロデ・アンテパスのことである。
- ② 彼は、ガリラヤの国主であった(4年B. C. ~A. D. 36年)。
- ③ バプテスマのヨハネを投獄する人物である。
- ④ 国主は、王よりもランクの低い地位のことである。

(4) 「その兄弟ピリポがイツリヤとテラコニテ地方の国主」

- ① ヘロデ・ピリポは、アンテパスの腹違いの兄弟である。
- ② 彼は、ガリラヤの北に領地を持った(4年B. C. ~A. D. 34年)。

(5) 「ルサニヤがアビレネの国主であり」

- ① アビレネは、さらに北方、シリアに位置する。

(6) 「アンナスとカヤパが大祭司であったころ」

- ① アンナスは、元大祭司である(A. D. 6~15年)。
- ② 引退しても、大祭司は終身職であるため、大祭司という称号が付く。
- ③ カヤパはアンナスの義理の息子である(A. D. 18~36年)。
- ④ 実権はアンナスが握っていた。

3. 2b 節

「神のことばが、荒野でザカリヤの子ヨハネに下った」

(1) 「ザカリヤの子ヨハネ」

- ①ルカは、1章で説明した内容を前提に、この箇所を書いている。
- ②ザカリヤの職業は、祭司であった。

(2) 当時ヨハネはおよそ30歳になっていた。

- ①祭司の息子は、30歳で活動を開始した。
- ②旧約時代、祭司は30歳から奉仕を始める。

(3) 「神のことばが、下った」

- ①ルカはヨハネを預言者として理解している。

②ルカ1:76の成就(ザカリヤの預言)

「幼子よ。あなたもまた、いと高き方の預言者と呼ばれよう。主の御前に先立って行き、その道を備え、」

③エレ1:2

「アモンの子、ユダの王ヨシヤの時代、その治世の第十三年に、エレミヤに【主】のことばがあった」

*ホセ1:1、ミカ1:1、ハガ1:1など参照

- ④バプテスマのヨハネは、旧約最後の預言者である。

II. 預言の成就(マコ1:2~5)

1. 2~3 節

「預言者イザヤの書にこう書いてある。『見よ。わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を整えさせよう。荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を用意し、主の通られる道をまっすぐにせよ』』。そのとおりに、」

- (1) マルコの福音書で唯一の旧約聖書からの引用(イエスのことばを除く)

- ①マルコの福音書の読者は、ローマ人である。

- (2) イザ40:3の成就

「荒野に呼ばれる者の声がある。『主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ』」

(3) 3つの預言をひとつにまとめて引用している。

- ①出 23 : 20、マラ 3 : 1、イザ 40 : 3
- ②同じテーマの預言をまとめ、代表的な預言者の預言として引用する。
- ③「荒野体験」が共通したテーマになっている。
- ④マルコはこれらの預言を、メシアに適用している。

2. 4 節

「バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた」

(1) 「罪の赦しのための悔い改めのバプテスマ」

- ①バプテスマによって罪が赦されるわけではない。
- ②罪の赦しに関係したバプテスマ、という意味である。
- ③悔い改めとは、心の方向転換のこと。
- ④悔い改めと罪の赦しが、バプテスマに先行する。

3. 5 節

「そこでユダヤ全国の人々とエルサレムの全住民が彼のところへ行き、自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた」

(1) ユダヤ的誇張法が使用されている。

- ①ヨハネの影響が広範囲に及んだことを表している。
- ②「出て行き」は、能動態の未完了形。継続した動作。
- ③「バプテスマを受けていた」は、受動態の未完了形。継続した動作。

(2) 場所は、ヨルダン川

- ①ヨシュアに率いられた民が、約束の地に入る際にこの川を渡った。
- ②預言者エリヤが活躍した地である。
- ③ユダヤ人には、霊的遺産が遺されている地である。

(3) 「自分の罪を告白して」

- ①イスラエルの歴史を知るユダヤ人は、民族的罪と自らの罪を認識していた。
- ②神の評価、判断に同意すること。

Ⅲ. ヨハネの風貌 (マコ 1 : 6)

1. 6節

「ヨハネは、らくだの毛で織った物を着て、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた」

(1) 衣装

- ①らくだの皮ではなく、らくだの毛で織った上着である。
- ②腰に皮の帯(ガードル)を締めていた。

(2) 常食

- ①いなご。乾燥させたいなご。レビ11:22で許可されている。
- ②野蜜。岩の割れ目に蜂の巣があった。

2. 預言者エリヤの風貌

(1) 2列1:8

「彼らが、『毛衣を着て、腰に皮帯を締めた人でした』と答えると、アハズヤは、『それはティシュベ人エリヤだ』と言った」

(2) バプテスマのヨハネは、意図的にエリヤ的風貌を真似た。

- ①エリヤは、神の民に悔い改めを迫る預言者である。
- ②バプテスマのヨハネの奉仕も、神の民に悔い改めを迫るものである。

結論:

1. 福音の歴史性

(1) ルカは、救済の歴史を世界史の中に位置づけようとした。

- ①年代だけなら、テベリオの治世の第15年だけで十分である。
- ②それ以外の5つの要素は、当時の政治状況の要約である。
- ③イエスの公生涯は、非常に複雑な政治状況の中で始まった。

(2) イエスの公生涯は、バプテスマのヨハネの登場から始まる。

①使1:22

「すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちを離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません」

②使10:37、13:24~25 参照

(3) 福音記者たちは、正直に、率直に、創作の手を加えずに書いている。

- ①これらのことは、私たちが誕生するはるか前に起こった。
- ②不安になって、創作の手を加える必要はない。
- ③書かれていることを、そのまま受け取ればよい。

2. バプテスマの意味

(1) 基本的意味は、一体化である。

- ①バプテスマのヨハネとの一体化
- ②そのメッセージとの一体化
- ③バプテスマのヨハネが示すメシアを信じる。

(2) ユダヤ教の洗礼との比較

①清めのための洗礼(洗い)とは異なる。

*自分で水に入る。

*繰り返し実行する。

*クムランのエッセネ派の洗礼も、これと同じである。

②異邦人がユダヤ教に改宗する際の洗礼とも異なる。

*自分で水に入る。

③ヨハネの洗礼の新しさ

*ユダヤ人にこの洗礼を命じた。

*他の人によって洗礼が施される。

*内面の変化が前提になっている。

(3) クリスチャンの洗礼

①内面の変化(新生体験)が前提になっている。

②洗礼は救いの条件ではない。

③他の人によって施される。

④一度限りでよい。

3. 忍耐の必要性

(1) マラキからバプテスマのヨハネまで、約400年以上が経過している。

①バプテスマのヨハネの誕生から、約30年が経過している。

(2) 詩37:7

「【主】の前に静まり、耐え忍んで主を待て。おのれの道の栄える者に対して、悪意

を遂げようとする人に対して、腹を立てるな」

(3) 1ペテ1:12

「彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告知されました。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです」

①預言者たちは、自らの預言したことの成就を見ることなしに死んでいった。

(4) 私たちへの教訓

①忍耐は、神の主権への応答である。

②祈りの答えは、時には「待て」であり時には「否」である。

③それでも、私たちは神を信じる。

「バプテスマのヨハネのメッセージ」 ルカ3:7~18

1. はじめに

(1) イエスの公生涯の開始

- ①バプテスマのヨハネとともに始まった。
- ②ルカはそれを世界史の中に位置づけた。
- ③ヨハネの登場は預言の成就であった。

(2) 今日の箇所は、その続きである。

①ヨハネのメッセージ (A. T. ロバートソンの §22)

*マタ3:7~10

○ルカ3:7~14

②ヨハネによるメシアの紹介 (§23)

*マコ1:7~8

*マタ3:11~12

○ルカ3:15~18

2. アウトライン

- (1) 神の国の到来 (ルカ3:7~9)
- (2) 神の国にふさわしい生活 (ルカ3:10~14)
- (3) 神の国をもたらすメシア (ルカ3:15~17)

3. メッセージのゴール

- (1) バプテスマのヨハネの基本姿勢
- (2) 紀元1世紀の宗教改革
- (3) 弟子たる者のライフスタイル

このメッセージは、バプテスマのヨハネのメッセージについて学ぼうとするものである。

I. 神の国の到来 (ルカ3:7~9)

1. 7節

「それで、ヨハネは、彼からバプテスマを受けようとして出て来た群衆に言った。『まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか』」

- (1) 「群衆」

- ①彼らは、契約の民である。
- ②神に愛されている民である。
- ③指導者たちの誤った教えに惑わされている民である。
- ④ヨハネが始めた「神の国運動」は、民族的運動となりつつある。

(2) 「彼からバプテスマを受けようとして出て来た」

- ①大きな運動の中には、清濁ともに含まれている。
- ②出エジプトの時と同じである。
- ③その彼らに、ヨハネは「言った」。
*未完了形。繰り返し言った。いつも言っていた。

(3) 「まむしのすえたち」

- ①厳しい比喩を用いた呼びかけである。
- ②迫りくる裁きを考えると、このような厳しい言葉が必要となる。
- ③イスラエルには20種類以上の毒蛇がいる。
*まむしの毒は、呼吸器系と血液(血管)を破壊する。
*コブラの毒は、神経系を破壊する。
- ④この比喩は、ほとんど「サタンの子ども」と言うに等しい。
- ⑤ヨハ8:44

「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです」

(4) 「だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか」

- ①「だれが必ず来る御怒りを逃れることができると教えたのか」という意味。
- ②「私はそんなことは教えていない」という意味が含まれている。

2. 8節

「それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』などと心の中で言い始めてはいけません。よく言うておくが、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです」

(1) 「それならそれで、悔い改めにふさわしい実を結びなさい」

- ①洗礼によって自動的に罪が赦されるわけではない。

②悔い改めがあり、それが実によって証明される。

(2) 『われわれの父はアブラハムだ』などと心の中で言い始めてはいけません」

①当時のユダヤ教は、アブラハムの子孫なら神の国に入れると教えていた。

②彼らは、神の国に入るよりも、そこに留まることに関心を向けていた。

③ヨハネは、家系が救いの保証になるわけではないと教えた。

④ヨハ8:39

「彼らは答えて言った。『私たちの父はアブラハムです』。イエスは彼らに言われた。『あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行いなさい』」

(3) 「よく言うておくが、神は、こんな石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことがおできになるのです」

①石は、異邦人を指す比喩的言葉である。

②ユダヤ人は異邦人を見下していた。

3. 9節

「斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます」

(1) これは、最後の裁きではなく、迫り来る裁きを描写する比喩的言葉

①神の国が到来したことに關する裁きである。

②この裁きは、紀元70年に実行された。

II. 神の国にふさわしい生活 (ルカ3:10~14)

1. 群衆の問い (10~11節)

「群衆はヨハネに尋ねた。『それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか』。彼は答えて言った。『下着を二枚持っている者は、一つも持たない者に分けなさい。食べ物を持っている者も、そうしなさい』」

(1) 「それでは、私たちはどうすればよいのでしょうか」

①悔い改めの表現として、何をすべきか。

②業や洗礼による救いではない。

(2) ヨハネの回答

①各グループに応じて、その弱点を指摘している。

②上着(ヒマティオン)ではなく、下着(キトン)である。

③より重要性の低い物に言及している。

2. 取税人たちの問い(12~13節)

「取税人たちも、バプテスマを受けに出て来て、言った。『先生。私たちはどうすればよいのでしょうか』。ヨハネは彼らに言った。『決められたもの以上には、何も取り立ててはいけません』」

(1) 取税人

①特に通行税を徴収する人たち

②入札によって、ローマから徴税権をもらう。

③税額は前納であるため、それ以降の徴収が乱暴なものになる。

(2) 「決められたもの以上には、何も取り立ててはいけません」

①取税人がごまかしをしていることは、周知の事実である。

②彼らには、法廷での証言能力は認められていなかった。

3. 兵士たちの問い(14~15節)

「兵士たちも、彼に尋ねて言った。『私たちはどうすればよいのでしょうか』。ヨハネは言った。『だれからも、力づくで金をゆすったり、無実の者を責めたりしてはいけません。自分の給料で満足しなさい』」

(1) ローマ人でなく、ユダヤ人兵士である。

①ヘロデ・アンテパスに雇われていたのであろう。

②取税人の仕事が円滑に進むように、保護した。

③中には悪質な兵士がいて、脅迫によって金品を奪っていた。

(2) 「自分の給料で満足しなさい」

①自分に与えられている力を、利得のために用いない。

②与えられているもので満足する。

Ⅲ. 神の国をもたらすメシア(ルカ3:15~17)

1. 15節

「民衆は救い主を待ち望んでおり、みな心の中で、ヨハネについて、もしかするとこの方がキリストではあるまいか、と考えていたので、」

(1) ヨハネが語る神の国とメシアに関するメッセージが、大きな影響を与えた。

- ①ヨハネはダビデの家系ではない。
- ②ヨハネは奇跡を行っていない。
- ③にもかかわらず、民衆はヨハネがメシアではないかと考えた。

2. 16~17節

「ヨハネはみなに答えて言った、『私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりもさらに力のある方がおいでになります。私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません。その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります。また手に箕を持って脱穀場をことごとくきよめ、麦を倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます』」

(1) ヨハネとメシアの比較

「私などは、その方のくつのひもを解く値うちもありません」

- ①ユダヤ人の奴隷は、主人に仕えるが、くつのひもを解くことはしなかった。
- ②それは、異邦人の奴隷の役割であった。
- ③ラビは無料で教え、生徒はラビに献身的に仕えた。
- ④そのような生徒でも、ラビのくつのひもを解くことだけはしなかった。

(2) ヨハネのバプテスマとメシアのバプテスマの比較

「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。…その方は、あなたがたに聖霊と火とのバプテスマをお授けになります」

- ①ヨハネのバプテスマは、水のバプテスマである。
- ②メシアのバプテスマは、聖霊と火のバプテスマである。
- ③聖霊のバプテスマ

*使2:1~4で成就した。

④火のバプテスマ

*積極的な意味で解釈すれば、火による聖めのバプテスマ

*使2:3

「炎のような分かれた舌が現れて、ひとりひとりの上にとどまった」

*否定的な意味で解釈すれば、裁きのバプテスマ。

*マラ3:2~3(再臨のメシア)

「だれが、この方の来られる日に耐えられよう。だれが、この方の現れるとき立っていられよう。まことに、この方は、精錬する者の火、布をさらす者の灰汁のようだ。この方は、銀を精錬し、これをきよめる者として座に着き、レビの子らをきよめ、彼らを金のように、銀のように純

粹にする。彼らは、【主】に、義のささげ物をささげる者となり、」

⑤2つのグループにそれぞれ別のバプテスマが与えられる。

*信者には、聖霊のバプテスマ

*不信者には、火のバプテスマ

(3) メシアのバプテスマの特徴

①キリストのみからだなる教会にバプテスマされる。

②聖霊の内住が始まる。

③聖霊の賜物が与えられる。

3. 18節

「ヨハネは、そのほかにも多くのことを教えて、民衆に福音を知らせた」

(1) これは、まとめである。

①福音とは、メシア的王国が近づいたということ。

結論：

1. バプテスマのヨハネの基本姿勢

(1) 私ではなく、あの方。

(例話) 小学校時代の国語の教科書(バントのサインを無視した選手)

(2) 私たちが最も恐るべきこととは何か。

①主のために何もしない生活を送ること

②主の働きを妨害すること

2. 紀元1世紀の宗教改革

(1) マタ3:7~9

「しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見たとき、ヨハネは彼らに言った。『まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。「われわれの父はアブラハムだ」と心の中で言うような考えではいけない。あなたがたに言うが、神は、この石ころからでも、アブラハムの子孫を起こすことができになるのです』

①ルカには、「パリサイ人やサドカイ人」という情報がない。

②パリサイ人とサドカイ人は、敵対関係にある。

*パリサイ人やサドカイ人の理解は、福音書の世界を知るための必須条件。

*彼らは、共通の関心のために荒野に出て来た。

*ヨハネによる神の国運動が、ユダヤ教の中枢にも影響を与え始めた。

③「バプテスマを受けに来るのを見たとき」

*彼らは、バプテスマを受けにきたのではない。

*ヨハネのバプテスマを観察に来た。

*サンヘドリンによる正式な調査であるかどうかは、不明。

④ヨハ1:19

「ヨハネの証言は、こうである。ユダヤ人たちが祭司とレビ人をエルサレムからヨハネのもとに遣わして、『あなたはどなたですか』と尋ねさせた」

(2)『われわれの父はアブラハムだ』と心の中で言うような考えではいけない」

①これは、パリサイ的ユダヤ教を否定する言葉である。

②ユダヤ人たちはローマの支配下にあった。

③さらに、一般民衆は、パリサイ的ユダヤ教の支配下にあった。

④ヨハネによる神の国運動は、霊的革命である。

⑤単なる破壊ではなく、聖書信仰への回帰である。

⑥支配者層との対立が、ヨハネの死とメシアの死をもたらした。

⑦メシアの死によって、霊的革命は普遍的性格を持ち始める。

⑧キリスト教とは、普遍的ユダヤ教のことである。

3. 弟子たる者のライフスタイル

(1) ヨハネは、職場放棄や、荒野での生活を推奨したわけではない。

①置かれている生活の場で、メシアの弟子として生きよと励ました。

②終末的ライフスタイルとは、この世でメシアの弟子として生きること。

(2) 3種類の人々への勧告

①民衆に対して：気前のよい、寛容なライフスタイル

②取税人に対して：正直なライフスタイル

③兵士に対して：満ち足りる心を持ったライフスタイル

「イエスのバプテスマ」 マタ3:13~17

1. はじめに

(1) イエスの公生涯の開始

- ①バプテスマのヨハネとともに始まった。
- ②神の国運動は、民族的運動となった。
- ③今日の箇所、いよいよメシアが登場する。

(2) イエスのバプテスマ (A. T. ロバートソンの §24)

***マコ1:9~11**

○マタ3:13~17

***ルカ3:21~23**

(例話) 映画「鳥」 1963年

映画「マーニー」 1964年 ティッピー・ヘドレンとショーン・コネリー
サイコサスペンス 主人公の登場シーン

(3) イエスのバプテスマは、私生活と公生涯を区分する出来事である。

- ①マタ3:13と4:12に挟まれた箇所
*前者では、イエスはガリラヤを出、後者ではガリラヤに戻っている。
- ②2つの出来事が記されている。
*ヨハネによるバプテスマとサタンによる誘惑である。
- ③2つの出来事は、イエスのメシアとしての自己認識に深く関係している。

2. アウトライン

- (1) イエスのバプテスマ (マタ3:13~15)
- (2) 天からの承認 (マタ3:16~17)

3. メッセージのゴール

- (1) 聖霊が下ったことの意味
- (2) 天からの声がしたことの意味

このメッセージは、イエスのバプテスマについて学ぼうとするものである。

I. イエスのバプテスマ (マタ3:13~15)

1. イエスの登場

「さて、イエスは、ヨハネからバプテスマを受けるために、ガリラヤからヨルダンにお着きになり、ヨハネのところに来られた」(13節)

(1) 神の国運動は、民族的運動となった。

- ①エズラの時以来、あるいは、それ以上の霊的覚醒が起こった。
- ②人々は、民族的罪と個人的罪を告白し、ヨハネからバプテスマを受けた。
- ③メシア到来の希望が高まった。
- ④そして、神の 때가 満ちた。ヨハネのバプテスマの噂がナザレにまで届いた。

(2) **「ガリラヤからヨルダンにお着きになり、」**

①イエスは12歳以降も、ガリラヤのナザレに住み続けた。

*約30年間

- ②そして、メシアとして荒野に登場する。
- ③多くの目撃者の前でという意味では、最高の舞台である。

(3) **「ヨハネからバプテスマを受けるために、」**

- ①ガリラヤからヨルダンに来たことは、自発的行為である。
- ②ここで、2つの道が交差し、先の道が舞台から徐々に消えていく。

2. ヨハネの疑問(14節)

「しかし、ヨハネはイエスにそうさせまいとして、言った。『私こそ、あなたからバプテスマを受けるはずなのに、あなたが、私のところにおいでになるのですか』」(14節)

(1) ヨハネのバプテスマの性質

- ①罪を悔い改めた人が受けるバプテスマである。
- ②イエスには罪がないので、このバプテスマはイエスとは無関係である。

(2) ヨハネの謙遜

- ①イエスはヨハネよりも偉大である。
- ②ヨハネはイエスの前では罪人である。
- ③それゆえ、ヨハネがイエスからバプテスマを受けるべきである。

(3) ヘブル人の福音書(紀元2世紀の外典)

「見よ、主の母と、主の兄弟たちが、彼に言った。『バプテスマのヨハネが罪の赦しのためのバプテスマを施している。私たちも行って、彼からバプテスマを受けようでは

ないか。』しかし、主は彼らに言った。『下って行って、ヨハネからバプテスマを受けよとは、私がどのような罪を犯したというのか。ただし、もし私がこのように言うことが無知のゆえであるとするなら、それが罪である可能性はあるが』

①ヘブル人の福音書は、イエスのバプテスマに関して疑問を呈している。

②マタイは、誰もが感じるこの疑問に答えようとしている。

*マタ3:14~15は、マタイの福音書に特有のものである。

3. イエスの回答 (15節)

「ところが、イエスは答えて言われた。『今はそうさせてもらいたい。このようにして、すべての正しいことを実行するのは、わたしたちにふさわしいのです』。そこで、ヨハネは承知した」(15節)

(1) イエスは、ヨハネの理屈を否定していない。

①別の理由で、バプテスマを受けるのである。

(2) 「すべての正しいことを実行する」

①メシアはモーセの律法を成就するために来られた。

②メシアは罪人の罪を贖うために来られた。

③イエスのバプテスマは、ヨハネのバプテスマを承認し、罪人と一体化すること。

④イエスは、神の御心をすべて行おうとされた。

(3) バプテスマの本来の意味は、一体化である。

①布を染料液に浸けると、その色に染まる。それがバプテスマの意味である。

②ヨハネが語る神の国のメッセージとの一体化

③メシアの先駆者であるヨハネとの一体化

④罪人との一体化(罪人の一人のようになった)

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです」(IIコリント5:21)

II. 天からの承認 (マタ3:16~17)

1. 神の御霊 (16節)

「こうして、イエスはバプテスマを受けて、すぐに水から上がられた。すると、天が開け、神の御霊が鳩のように下って、自分の上に来られるのをご覧になった」

(1) バプテスマそのものではなく、バプテスマの結果が記されている。

①ルカ3:21

「さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、」(ルカ3:21)

②イエスは、そこで祈っておられた。

③バプテスマそのものに神秘的力があるのではない。

(2) 「神の御霊が鳩のように下って、」

①聖霊は、三位一体の第3位格である。

②この箇所は、ユダヤ的解釈が必要である。

③鳩の姿は、ユダヤ人たちがそれを聖霊と認識できるようにするため・

④聖霊を鳩と結びつける考え方の起源は、創世記1:2にある。

「地は形なく、むなしく、やみが淵のおもてにあり、神の霊が水のおもてをおおっていた」(口語訳、創1:2)

*母鳥が卵を抱くように、神の霊が地表を抱いている。

⑤後代のラビ文書では、その鳥は鳩であるとの解説がされるようになる。

*鳩の性質は、柔和、平和、聖潔、などである。

(3) イエスの性質がこの時から変化したわけではない。

①イエスは、聖霊によって誕生したお方である。

②最初から、その性質は聖い。

③これは、メシアとして公に宣言されたということである。

④また、イエスはメシアとしての奉仕のための力を受けた。

「その上に、【主】の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と【主】を恐れる霊である」(イザ11:2)

2. 天からの声(17節)

「また、天からこう告げる声が聞こえた。『これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ』」(17節)

(1) 専門的には、これは「バット・コル」と呼ばれる現象である。

①中間時代のユダヤ教では、「バット・コル」は、預言者が登場しなくなつて以降の神との交流法であるとされた。

②ここで、神との交流が再開された。

③イエスの公生涯で、3度天からの声が聞こえてきた。

3. イエスのバプテスマは、三位一体の神がすべてかかわった出来事となった。

(1) 御子がバプテスマを受け、御霊が鳩のように下り、父なる神が声を出された。

(2) 天からの声もまた、イエスのメシア性の公の宣言である。

「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」(17節)

4. ルカ3:23a

「教えを始められたとき、イエスはおよそ三十歳で、人々からヨセフの子と思われていた」(ルカ3:23a)

(1) 旧約聖書では、30歳は奉仕を開始する年齢であることが多い。

①ヨセフは、30歳でエジプトの宰相となった(創41:46)。

②祭司は、30歳から奉仕を始めた(民4:2)。

③ダビデは、30歳で王となった(2サム5:4)。

(2) ルカはイエスの年齢を知らなかったわけではない。

①イエスが、公生涯に立つ準備ができていることを伝えている。

結論：

1. 聖霊が下ったことの意味

(1) バプテスマのヨハネのバプテスマと、クリスチャンのバプテスマは違う。

(2) クリスチャンのバプテスマは、キリストに付くバプテスマである。

(3) バプテスマは、キリストを信じた人にすでに起こっていることの象徴である。

①キリストとの一体化

②普遍的教会の一員となっている。

(4) キリストに起こったことは、私たちにも起こる。

①イエスの上に聖霊が下り、メシアの奉仕に必要な力を与えた。

②私たちにも同じことが起こる。

*聖霊の内住

*聖霊の賜物の付与

(例話) 小学校5年生で、父からご褒美を受けた。50ドル以下のもの。

2. 天からの声がしたことの意味

「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」(17節)

(1) 詩2:7とイザ42:1の合体

①中間時代のユダヤ教は、この2つの箇所をメシア預言と理解していた。

(2) 詩2:7

「わたしは【主】の定めについて語ろう。主はわたしに言われた。『あなたは、わたしの子。きょう、わたしがあなたを生んだ』」(詩2:7)

(3) イザ42:1

「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす」(イザ42:1)

(4) 天からの声は、イエスにメシアとしての自己認識を与えた。

①メシアは、根源的な意味で、神の子である。

②メシアは、主の僕である。

*登場して最初にしたのは、ヨハネからバプテスマを受けることである。

(例話) 代替わりした社長の息子が、最初にトイレ掃除をするようなもの。

(5) サタンの誘惑は、メシアが本当に主のしもべであるかどうかを試す。

(6) クリスチャンの自己認識

①神の子

②キリストのしもべ

「イエスが受けた3つの誘惑」 マタ4:1~11

1. はじめに

(1) イエスの公生涯の開始

- ①バプテスマと誘惑は、連続した出来事である。
- ②バプテスマによって、メシアの2つの自己認識が明らかになった。
 - *メシアは、神の子である。
 - *メシアは、主のしもべである。
- ③今日の箇所、メシアの自己認識が試される。
- ④3つの誘惑は、メシアが受ける誘惑である。

(2) イエスが受けた3つの誘惑 (A. T. ロバートソンの §25)

*マコ1:12~13

○マタ4:1~11

*ルカ4:1~13

2. アウトライン

- (1) 第1の誘惑 (1~4節)
- (2) 第2の誘惑 (5~7節)
- (3) 第3の誘惑 (8~11節)

3. メッセージのゴール

- (1) 人類の先祖との関係
- (2) イスラエルの民との関係
- (3) 私たちとの関係

このメッセージは、イエスが受けた3つの誘惑について学ぼうとするものである。

I. 第1の誘惑 (1~4節)

1. 1節

「さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御霊に導かれて荒野に上って行かれた」

(1) 「悪魔の試みを受けるため」

- ①悪魔は、ギリシア語でディアボロス。
- ②ヘブル語で、サタナス。
- ③ともに、訴える者という意味。

④試みは、ギリシア語ペイラゾウ。

*誘惑 (tempt)

*試す (test)

(2) 「御霊に導かれて」

①聖霊は、信者を誘惑に導くが、自らは誘惑しない。

②誘惑の目的は、神への従順を学ぶためである。

③ヘブ5:8

「キリストは御子であられるのに、お受けになった多くの苦しみによって従順を学び、」

(3) 「荒野に上って行かれた」

①荒野は、ヘブル語で「ミッドバル」。

*ダバール (言葉) と関係した言葉

*荒野は、神の声を聴く場所である。

②悪魔の誘惑は、荒野で起こった。

*神と会う場所

*試練を受ける場所

*悔い改めを経験する場所

*伝統的に、誘惑の場所はエリコを見下ろす山であると言われている。

③クリスチャンにとって、荒野の体験は必要不可欠である。

(4) 1節は、2つの誤解を解いている。

①誘惑を受けたとき、神を非難するのは的外れである。

②悪魔は単独でなんでもできると考えるのも、的外れである。

*悪魔は、神の許しの範囲でしか行動できない。

*ヨブ記1、2章

2. 2節

「そして、四十日四十夜断食したあとで、空腹を覚えられた」

(1) ユダヤ人は断食の習慣を持っていた。

①深い悲しみと悔い改めの表現

②神との親密な関係を持つため

(2) ルカ4:1b~2の情報

「そして御霊に導かれて荒野におり、四十日間、悪魔の試みに会われた。その間何も食わず、その時が終わると、空腹を覚えられた」

- ①40日間、何も食べなかった。水は飲んだ。
- ②40日間の断食は、可能である。
- ③悪魔の試みは、最初の40日間のときからすでにあった。
- ④40日後に、さらに激しくなったということであろう。

3. 3節

「すると、試みる者が近づいて来て言った。『あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい』」

(1) リビングバイブルの訳

「どうだい。ひとつ、ここに転がっている石をパンに変えてみたら？ そうすりゃあ、あんたが神の子だということも一目瞭然だろうが」

- ①「あなたは神の子なら」ではなく、「あなたは神の子なのだから」という意味。
- ②悪魔は、イエスが神の子であることを知っていた(マタ3:17)。
- ③悪魔は、イエスが神のしもべとしての道を歩むかどうかを試している。

(2) この誘惑の内容

- ①イエスには、石をパンに変える力はあった。
- ②その力を、自らを満足させるために用いよという誘惑である。
- ③永遠に価値あるものを優先させるのか、当面の必要を優先させるのか。
- ④父の御心に従うのか、父から独立して行動するのか。

*父の御心は、荒野で空腹であること。

4. 4節

「イエスは答えて言われた。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる』と書いてある」

(1) 申8:3からの引用

「それで主は、あなたを苦しめ、飢えさせて、あなたも知らず、あなたの先祖たちも知らなかったマナを食べさせられた。それは、人はパンだけで生きるのではない、人は【主】の口から出るすべてのもので生きる、ということ、あなたにわからせるためであった」

- ①イスラエルの民は、荒野でマナを食べて生き延びた。
- ②神が教えようとした教訓

*人間は、自然によって養われているのではない。

*神が、自然を通して、また自然を用いて、人間を養っているのだ。

(2) 聖句の引用による勝利

- ①霊的戦いに勝利する秘訣がここに見られる。
- ②多くの聖句を心の中に蓄えておく必要がある。

II. 第2の誘惑 (5~7節)

1. 5~6節

「すると、悪魔はイエスを聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて、言った。『あなたが神の子なら、下に身を投げてみなさい。「神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる」と書いてありますから』」

(1) ルカではこれが第3の誘惑になっている。

- ①順番は、マタイが正しいと思われる。
- ②ルカは、最後のエルサレムの神殿の場面をもってくる。

*ルカの特徴は、エルサレムと神殿の強調にある。

(2) 「神殿の頂」

- ①神殿の南東の角。ケデロンの谷を眼下に見る場所。
- ②悪魔は、そこから下に身を投げるように誘惑する。
- ③奇跡を見せれば、人々はあなたをメシアとして受け入れるだろうという誘惑。

(3) 悪魔による引用と実際の聖句の比較。詩91:11~12

『神は御使いたちに命じて、その手にあなたをささえさせ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにされる』と書いてありますから」(マタ4:6)

「まことに主は、あなたのために、御使いたちに命じて、すべての道で、あなたを守るようにされる。彼らは、その手で、あなたをささえ、あなたの足が石に打ち当たることのないようにする」(詩91:11~12)

- ①悪魔の聖句引用は、巧妙である。
- ②「足が石に打ち当たることのないようにされる」

*悪魔は、神殿の頂から飛び降りても石に当たらないという適用をしている。

③ 「すべての道で」

*この言葉が省略されている。

*詩91は、神の御心の道を歩む人への守りの約束である。

2. 7節

「イエスは言われた。『あなたの神である主を試みてはならない』とも書いてある』」

(1) 申6:16の引用

「あなたがたがマサで試みたように、あなたがたの神、【主】を試みてはならない」

①荒野の旅で、水がなくなった時に、民は【主】に向かってつぶやいた。

②出17:1~7の出来事

(2) ここでも、イエスは聖句の引用によって勝利している。

Ⅲ. 第3の誘惑(8~11節)

1. 8~9節

「今度は悪魔は、イエスを非常に高い山に連れて行き、この世のすべての国々とその栄華を見せて、言った。『もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう』」

(1) 「高い山」とは、エリコを見下ろす場所であろう。

①オアシスの町の栄華があった。バルサム樹。

(2) 「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう」

①悪魔は、この世の支配者である。

②2コリ4:4

「その場合、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです」

③ヨハ12:31

「今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い出されるのです」

④悪魔を拝むことが、この世の栄華を得るための条件である。

(例話) ゴールデンタイムを上げるから、十字架は語るな。

⑤この誘惑もまた、十字架を抜きにした救いの道を提案するものである。

*十字架のない「王の王」になれという誘惑である。

2. 10節

「イエスは言われた。『引き下がれ、サタン。「あなたの神である主を拝み、主にだ

「け仕えよ」と書いてある』」

(1) 悪魔を、サタンと呼んでいる。

(2) 申6:13の引用

「あなたの神、【主】を恐れなければならない。主に仕えなければならない。御名によって誓わなければならない」

3. 11節

「すると悪魔はイエスを離れて行き、見よ、御使いたちが近づいて来て仕えた」

(1) 悪魔は、一時的にイエスを離れた。

①イエスの公生涯が次の段階に入った時に、再度登場する。

②マタ16:21~23

「しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。『下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている』」 (マタ16:23)

(2) 御使いたちがイエスに仕えた。

①神に従順な者への祝福

②仕えるとは、ギリシア語でディアコネオウである。

③未完了形。継続した動作。

結論：

1. イエスの誘惑と人類の先祖の関係

(1) アダムとエバが失敗した点を、最後のアダムが償っている。

(2) 3つの誘惑

①食欲と食べ物に関係した誘惑

創3:1

「さて、神である【主】が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。『あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか』」

②死ぬことはないという誘惑

創3:4

「そこで、蛇は女に言った。『あなたがたは決して死にません』」

③力を得よという誘惑

創3:5

「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです」

2. イエスの誘惑とイスラエルの関係

- (1) 誘惑の場は、ともに荒野である。
- (2) 期間に関しては、40年と40日の対比がある。
- (3) イエスの聖句引用は、すべて申命記からのものである。
 - ①申命記は、神とイスラエルの民の契約の書である。
 - ②イスラエルの民の契約違反の失敗を、メシアが償っている。

3. イエスの誘惑と私たちの関係

- (1) 1ヨハ2:16

「なぜなら、すべて世にあるもの、肉の欲、目の欲、生活のおごりは、御父から出ないで、世から出るからです」(新共同訳)

- (2) 人間が体験する誘惑の3つのタイプ

- ①肉の欲(食欲、性欲など)
- ②目の欲(目立ちたいという欲)
- ③生活のおごり(自分に栄光を帰したという欲)

- (3) 私たちが犯す失敗を、メシアが償っている。

- (4) 私たちへの教訓

- ①誘惑のタイミングは、バプテスマの直後である。
- ②神は、誘惑が起こることを許される。
- ③クリスチャンは、感情の高嶺に生きるのではない。
- ④神のことばを食して生きるのである。
- ⑤義認という救いは、瞬間的に起こる。
- ⑥しかし、聖化という過程に近道はない。
- ⑦神は、私たちを完成に導くために、私たちを試みられる。

*私たちは、神の子である。

*私たちは、神のしもべである。

- ⑧「私たちは、十字架を目指して低きに上るのである」